

2019 年度
常葉大学・常葉大学短期大学部
学生自主企画
とこは未来塾 -TU can Project
活動報告書



常葉大学
常葉大学短期大学部

目次

とこは未来塾 -TU can Project 概要	2
---------------------------	---

採択プロジェクト一覧	3
------------	---

2019 年度採択プロジェクト 報告書

1. 瀬名キャンパス大学短大活性化「輪を作り、輪を広げ、地域に大学を開く」プロジェクト	6
2. 三保 いっとコ! ～世界文化遺産からの招待状～	8
3. 放置竹林の解消と竹材の活用について	10
4. 静岡市における豪雨災害に備えた、環境教育による街づくりの推進	12
5. 石部棚田の魅力をぎゅぎゅっと伝え隊	14
6. 西里村まるごとエコミュージアムプロジェクト第2期	16
7. とこはお茶物語プロジェクト —お茶農家とのコラボレーションによる児童文化財を用いたお茶文化の継承—	18
8. 子どものあそび広場	20
9. 清水の魅力を観光客・外国人に伝えるマップ制作プロジェクト	22
10. 北街道プロデュース計画	24
11. 学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒へのセミナー事業	26
12. アスリートのためのサボ飯一腹が減っては勝負は出来ぬ—	28
13. Health for all people～大人も子供もみんなで元気に～	30
14. 大学生による「自然災害時における自発的な行動の促進及びきっかけづくり」	32
15. 南海トラフ巨大地震に活かす健康サポート支援に関する継続調査	34

ポスター集

1～15. 各プロジェクトのポスター集	36
---------------------	----

『2019 年度 とこは未来塾 -TU can Project』

「とこは未来塾 -TU can Project」は、本学の専門性及び地域の特性を活かして、地域社会・地域産業の様々な課題に学生が自主的・主体的に取り組むことを支援するものです。

1. 目的

学生ならではのユニークな「視点と発想」をもち、「熱意と創意」に満ちた自主的・自発的な取組に対し、大学から教員アドバイザーによる助言や活動資金の援助などの様々な支援を行う。大学が立地する静岡県を中心とした地域社会への貢献を果たすとともに、学生の若い力を地域の活性化に結び付ける。

2. 募集分野

(1) タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

キャンパス内で様々な地域交流活動を企画し、本学が標榜する「開かれた大学づくり」への貢献を目指す取り組み。

(2) タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

県内各地の地域課題の解決や地域活性化への貢献を目指す取り組み。

(3) タイプC：現代的課題解決プロジェクト

各種の研究開発や調査研究などを通して、社会的・公共的な課題解決への貢献を目指す取り組み。

3. 審査基準

- (1) 学生が問題意識を持ち、主体的に設定した明確な目的があること。
- (2) 本学の教育理念・3ポリシーとの関連で、意義が認められる。
- (3) 学内ないし地域の活性化もしくは課題解決が期待できる。
- (4) 多様なメンバーから組織され、適切な役割分担がなされている。
- (5) 明確な実行計画が示されており、着実な推進が期待できる。
- (6) 具体的かつ妥当な予算が計上され、執行計画が示されている。
- (7) 成果の見通しならびに成果還元の方法が具体的である。

4. 助成金額

- 1 プロジェクトあたり 15 万円を限度とする。

2019年度 とこは未来塾-TU can Project 採択プロジェクト一覧

	タイプ	テーマ	グループ名
1	A	瀬名キャンパス大学短大活性化 「輪を作り、輪を広げ、地域に大学を開く」プロジェクト	瀬名キャンパス活性化委員会
2	B	三保 いっコ! ～世界文化遺産からの招待状～	小豆川ゼミ
3	B	放置竹林の解消と竹材の活用について	山本隆三ゼミ
4	B	静岡市における豪雨災害に備えた、 環境教育による街づくりの推進	自然体験活動研究会
5	B	石部棚田の魅力をぎゅぎゅっと伝え隊	石部棚田の魅力を ぎゅぎゅっと伝え隊
6	B	西里村まるとエコミュージアムプロジェクト第2期	小杉山ゼミ
7	B	とこはお茶物語プロジェクト —お茶農家とのコラボレーションによる 児童文化財を用いたお茶文化の継承—	稲垣ゼミ2年
8	B	子どものあそび広場	村上ゼミ
9	B	清水の魅力を観光客・外国人に伝える マップ制作プロジェクト	清水マップ制作プロジェクト
10	B	北街道プロデュース計画	ミズオチ交流会
11	A	学生トレーナーによる高校運動部に 所属する生徒へのセミナー事業	C A T S
12	B	アスリートのためのサボ飯 —腹が減っては勝負は出来ぬ—	食プロデュース1
13	B	Health for all people ～大人も子供もみんなで元気に～	井口ゼミ
14	B	大学生による「自然災害時における 自発的な行動の促進及びきっかけづくり」	3.11はままつ東北復光プロジェクト
15	C	南海トラフ巨大地震に活かす 健康サポート支援に関する継続調査	T h u n d e r B i r d s

タイプ A : 開かれた大学づくりプロジェクト

タイプ B : 地域貢献・活性化プロジェクト

タイプ C : 現代的課題解決プロジェクト

とこは未来塾 -TU can Project

2019 年度採択プロジェクト
報告書

瀬名キャンパス大学短大活性化 「輪を作り、輪を広げ、地域に大学を開く」プロジェクト

造形学部造形学科 海野真梨菜(代表)、山口日和、山本智香子、松本直子、望月結真、杉浦百々加、藪井翔、山内裕太
音楽学専攻・音楽科 青木裕太、島田奈七海、鈴木美南、諏訪部勇斗、寺川太一、渥美秀美、馬場有彩

1. 目的・概要

瀬名キャンパスは学部の移転に伴いキャンパス内外での学生の活動が減り、閉鎖的な印象が生まれている。そこで、私たち学生が専門性やビジョンを共有し、共通の活動を進めることで、輪が生まれ、それをキャンパス全体と、様々な関係者に広げていくことで、地域社会に貢献するキャンパス「学生中心に文化を創造する場」として新しい姿を生み出すことができると考える。本プロジェクトは、大学・短期大学部の学生が協力し、基礎研究から仮説提案と検証、具体的なイベントの企画推進を通して、閉じかかったキャンパスを新たに地域に開き、創造的なキャンパスとして蘇らせることを実践的に研究する内容である。

2. 事業内容・方法

1 基礎研究：定性調査（インタビュー）2019年7月～9月

予備調査A／学生の認識の把握「私たちは今、何ができるのか」「これから何をしたいのか」「瀬名キャンパスを盛り上げる必要があるのか」。

予備調査B／保護者や学外関係者の期待の把握：「造形学部と音楽科に何を期待するのか」（図1 詳細）

	人数	対象者	調査項目
調査 A	15	1～4年の 瀬名キャンパスの学生	・高校生の時に大学生活に期待していた出来事を3つ上げてください。 ・瀬名キャンパスでの生活で嬉しいと感じること、悲しいと感じることを教えてください ・瀬名キャンパスでの授業や部活や過ごし方を誇りに思う、自慢したいと思いませんか？
調査 B	12	保護者	・大学生 / 短期大学生にどんな期待を持っていますか。(どんなことをしていてほしい、どんな姿であってほしいか) ・造形学部や音楽科・音楽科専攻の学生の学びやキャンパスライフを踏まえてどんなこととしていてほしいですか。 ・どのようなことができる人であって欲しいですか？
		他大学の友人	
		高校の教員	

図 1

1-2 基礎研究：親和図法による分析 2019年10月

予備調査A「瀬名キャンパスの活気の無さを残念に思う」「教員や授業の選択肢が少ない」「友達をたくさん作り、自分が豊かになっていく大学生活を期待していた」「自分の学びの成果を外部に発信したい」などの小ラベルが象徴的である。

予備調査B「地元での活動を通し地域に貢献してほしい」「子供に学びを活かした職に就いてほしい為、学費を払っている」などの小ラベルが象徴的である。

1-3 仮説提案 「造形学部と短大音楽科が、瀬名キャンパスを使って地域社会にできること」2019年10月

「キャンパス内部からの情報発信が少ない為、外部との関わりや交流が薄く、学生が抱えている問題点や現状が外部から理解されていない」ことが閉鎖的な印象の原因と結論づけ、情報発信が新しいキャンパスを生み出す第一歩になるという仮説を立てた。

2 予備企画X 「創立記念週間」音楽科ミニコンサート+造形展示/プレゼン 2019年6月

地域の自治会に案内し、瀬名キャンパスの2号館3階学生ホールで音楽科によるミニコンサートと、造形学部による作品展示、コースごとの学習内容のプレゼンを行った。地域住民約5名、学生や教職員約15名の参加を得て、相互理解の兆しが生まれた。

3 企画A+B 2020年1月

1-3の仮説と本来の目的である「専門性やビジョンの共有と共通の活動」を重要視し、当初の企画A「造形学部卒業制作展を軸にした、キャンパスを開く相互企画」と企画B「音楽科のイベントを軸にした相互協力企画」を統合した。キャンパス内での相互理解と、キャンパス外(地域)への発信を一つに行

4 企画C：瀬名キャンパスのキャッチフレーズ立案 2019年12月

瀬名キャンパス内の学生、職員、入学予定の高校生、卒業生を対象にアンケートを実施した。307件の回答から、「文化と想像のスタジオ」が127票（42%）、「芸術の丘」が94票（31%）となり、学生の実感を大学に提示した。



图 2

地域と大学の関係性を深めることを狙いに、西奈学区自治会連合会の15名の方を瀬名キャンパスに招き「学生と地域の協力の可能性」について意見交換した。自治会連合会の方々は「学生が地域での行事に参加してくれるだけで活気が出る」という思いを強く持っていた。こうした交流により、学生は地域貢献の態度が身につき、更に、地域課題に対して学修の専門性を活かした活動を行うことができれば、実践的な学びにつながるのではないかと考えた。

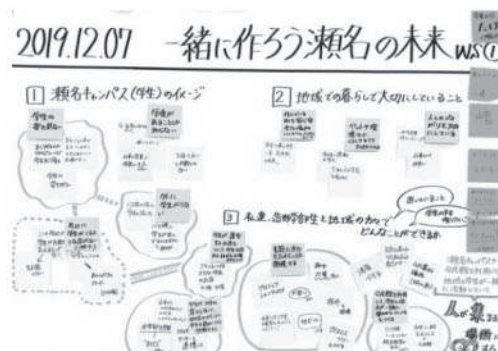


图 3

研究の成果を測るために、活動の前後(2019年6月、2020年12月)に瀬名キャンパスの学生に対して同じ内容のアンケート(図4参照)を実施し、比較を行った。事前調査ではaの項目に

関しては「楽器や歌の練習をしている」「何か作ってる人」という抽象的な内容だったが、事後調査では「音楽に熱心に取り組んでいるイメージ」「色々なジャンルのものを作っていてすごい」など、具体的な内容に変化していた。dの項目についても同様の効果が見られた。以上のことから、今回の研究活動の成果として瀬名キャンパス内の学生の相互理解を深めることができたことが理解できる。またbの項目に関しては会話をしたことがないという回答が92.1%から84.2%に減少した。しかし、一方でcの項目については交流したいという気持ち76%から48.6%に減少していた。

卒制ツアーという交流イベントを実施したが、目的の1つである「新しいキャンパスの姿を生み出す」ことのヒントにはならないのではないかと実感した。つまり表面的なイベントよりも事実に信頼の醸成が重要である。今後の展望は、地域社会に対し、造形学部と音楽科がお互いに質の高い文化活動を行い、それらを定期的に発信することで、双方の尊敬の念が深まると考える。具体的には、1年を通して、学びや活動の成果などの細かな情報を web や冊子を介して、学内外に発信し続け、学内外の関係者にどのような変化が見られるのかを観察することで、より本質的な成果に繋がると推察した。

三保、いittoコ！ ～世界文化遺産からの招待状～

所属：経営学部 小豆川ゼミ 3年・2年
経営学部経営学科 3年 増田 悠実(代表)

1. 目的・概要

昨年度、当ゼミでは自主活動として「静岡青春プロジェクト」を行った。この活動では、株式会社 Otono と静岡市の協力の下、清水港・三保・丸子・久能山・静岡おまの5地区の観光ガイドを作成した。また、観光ガイドを元に音声ツアーのシナリオ作成を行い、外部への発信を行った。

今年度は、5地区のうち特に観光需要が大きい三保エリア、開港120周年を迎えた清水港エリアの2地区に絞り、新たな観光ガイドの作成や観光地の分析を行う。活動を通じ、三保・清水港エリアの観光客の増加及び地域活性化への寄与を目的とする。

2. 事業内容・方法

【三保エリア】

11月に学内で開催された学園祭で、三保に関連する模擬店を出店、同時にアンケート調査を実施した。模擬店内容は、静岡市三保松原文化創造センター「みほしるべ」限定で販売されている商品の展示・販売を行い、また本プロジェクトで行った調査をもとに作成した資料の展示を行った。アンケートの内容は三保松原やみほしるべの来訪の有無、魅力や課題、ニーズを調査した。



【清水港エリア】

10月に清水区の日の出埠頭地区にて開催された、ミナトブンカサイに参加した。ミナトブンカサイでは、横浜国立大学や常葉大学造形学部などによって構成されたミナトブンカサイ実行委員による、日の出埠頭地区を案内する観光ガイドを受けた。観光ガイドでは、日の出埠頭地区の倉庫街や清水次郎長ゆかりの施設である末廣、次郎長生家がある次郎長商店街を回った。



このガイドを元に、追加取材を重ね、新たな観光ガイド、音声ツアーの作成を行った。音声ツアーのシナリオは、プロのシナリオライターであるなかよし様様に作成を依頼して、サービス・リリースを行うこととなった。

3. 事業成果

【三保エリア】

アンケート調査によると、集計したアンケートの総数は214件。「三保松原に訪れた経験の有無」では65%が経験あり、残り35%は経験無しと答えた。「設置して欲しい設備等は何か」の結果は、「ゆっくりできるテラスのあるカフェ」が64%と圧倒的に需要があることがわかった。続いて多いのは「子供が遊べる場所」「気軽に泊まれる温泉施設」となった。

【清水港エリア】

前述のミナトブンカサイ実行委員による観光ガイドの成果を引き継ぎ、清水港エリアの見所を再確認した。また、次郎長、四郎のガイドによる「次郎長商店街を巡る新たな音声ツアー」を作成した。

4. 今後の展開

【三保エリア】

現在三保エリアには家族連れや、若年層が立ち寄る集客施設が少ないことが課題である。よって、三保エリアにあまり関心が集まらず、加えて訪れた観光客は景観を楽しむ以外の手段がない。この現状を解決するための事業を、静岡市や株式会社 Otono と連携して取り組んで行けたらと考えている。

【清水港エリア】

音声ツアーは2020年1月に完成したばかりであるため、今後は外部への発信やプロモーション活動、さらに訪日外国人客（インバウンド）向け音声ツアーの多言語化も考えられる。また今回の音声ツアーを通じて、実際に観光客の増加や、清水港エリアの関心喚起につながることを期待している。

両エリアにおける活動を通じ、より多くの方に三保・清水港エリアの魅力を知ってほしいと考えている。



放置竹林の解消と竹材の活用について —放置竹林の解決を経済的な視点から考える—

所属：山本隆三ゼミ 3 年

経営学部 洞口竜児（代表）、王政凱、小笠原愛奈、鬼頭茉由、岸本一馬、高村晟弥、
坂本涼、櫻井広紀、堤友花、寺田七海、殿岡純奈、橋元愛、伏見啓輔、古橋瑞希、
牧之瀬大樹、見原優希、森本祐矢

1. 目的・概要

放置竹林は植生を破壊し、土砂災害を引き起こす可能性を高める。問題を解決する一つの方法は、放置竹林を利用し「価値のあるもの」を作り出すことである。当ゼミでは、静岡県
の放置竹林を解消するためにどのようなことができるのかを静岡県
県庁、静岡商工会議所、NPO法人などから学び、学習の成果と
放置竹林からの生産物を日本最大の環境展である「エコプロ 2019」
で展示することにより、来場者に放置竹林問題を認識してもらい、
解決策を共に考えてもらう取り組みを行った。



図 1. 放置され荒れた竹林

2. 事業内容・方法

本事業では、12 月 5 日～7 日にかけて東京ビックサイトで行われた「エコプロ 2019」に出展し、静岡県における放置竹林の現状と取り組みを紹介すると同時に、竹を活用した製品の紹介と放置竹林の新しい活用方法の提案を行った。

出展までに静岡県庁環境政策課、静岡商工会議所などから情報を戴き、ゼミ生が協力し、放置竹林問題を説明するポスターを作製、展示した。各団体が発行している冊子も来場者に配布すべく用意した。

①放置竹林問題についての展示

担当ブースにて来場者に放置竹林がどのような問題を引き起こすかの説明の展示と放置竹林の活用例の提案を行った。

②静岡県の放置竹林取への取り組みの紹介

静岡県庁環境政策課と静岡商工会議所の協力を得て、放置竹林の整備ハンドブックおよび静岡県の放置竹林への取り組みをまとめた冊子、ポスターを戴き、ブースにて無料配布を行った。

③放置竹林から発生した竹材を活用した玩具・製品の紹介

1) NPO法人まちなびや

放置竹林を伐採する際に発生する竹材で玩具を製作している。「ウグイス笛」と「がりがりトンボ」の二種類を安価に購入。竹製品へ触れてもらうことを目的とし、主に小・中学生の来場者へ配布した。



図 2. 実際のブースの様子



図 3. 竹の玩具で遊ぶ児童

2) 梅ヶ島クラブ

放置竹林の竹を粉碎し、パウダー状にしたものを肥料として活用し紅茶・チャイを生産している団体から「紅茶」と「チャイ」の二種類を安価に購入。ブースに来訪し、アンケートに協力していただいた方に優先的に配布した。

3. 事業結果・成果

エコプロ 2019 への全体来場者数は 147,653 人、当ブースにも多くの方の来場を得たが、その内 97 人にアンケートをお願いし、回答を得た。

幅広い年代の方が、展示を見た結果放置竹林問題に関心を持たれた（図 4）。そして放置竹林問題を周囲に伝えたいと答えた人も 9 割を超え（図 5）、放置竹林問題を多くの来場者に周知することができた。同時に常葉大学に関するアンケートも実施し、今回の活動を通して大学及び静岡県と県産品の PR にも貢献することができたと考える。以下はアンケートの回答を、グラフにしたものである。大学のイメージアップに貢献したと自負している。

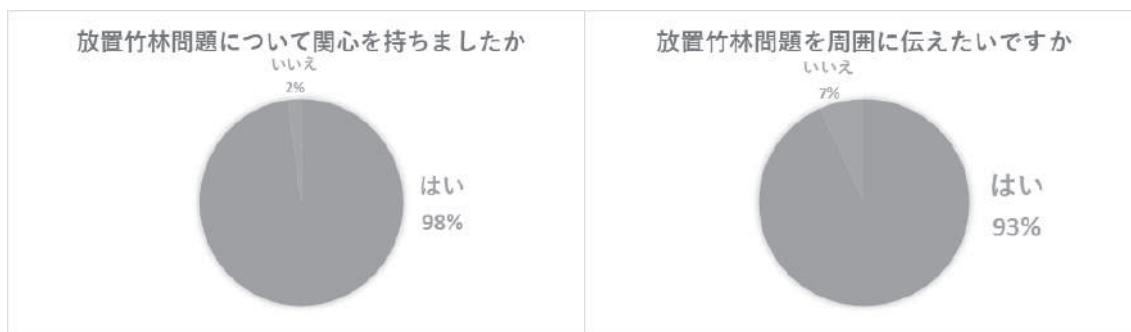


図 4. 放置竹林への関心

図 5. 周囲への情報の共有

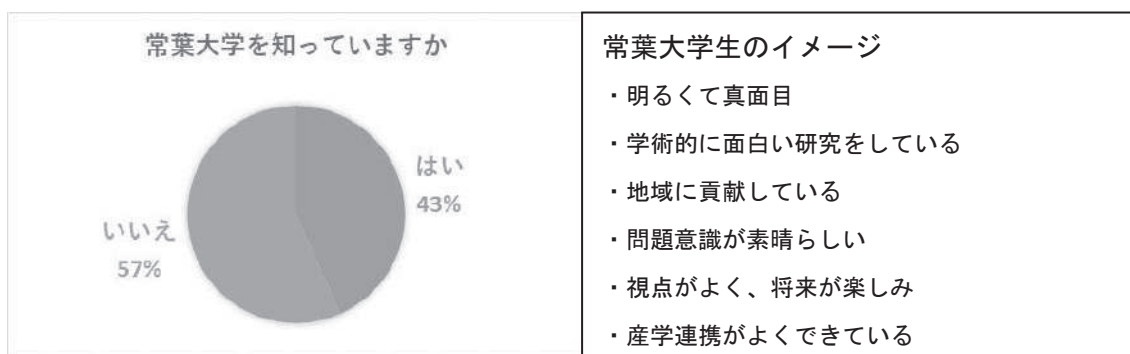


図 6. 常葉大学の認知度

図 7. 常葉大学生の印象

4. 今後の展望

今年度から始めた事業であるため、手探り状態での展示となった。しかし、放置竹林を利用し、「価値のあるもの」を創出する基盤作りはでき、今後に繋げることができると考える。

放置竹林から「価値のあるもの」を作り出すためには、技術の発展が必要不可欠である。今後は竹を利用した製紙技術やセルロースナノファイバーなどの研究を行っている企業・団体と連携を取り、放置竹林問題解決に向け活動を継続して行っていきたいと考えている。さらに、後輩にもこの活動を引き継いでいき、地域と大学の活性化に貢献していきたい。

静岡市における豪雨災害に備えた環境教育による街づくりの推進

自然体験活動研究会

代表学生：増田敦人、大庭峻輔、小洞晴菜、望月咲見、水谷真菜

1. 目的・概要

はじめに、私たち自然体験活動研究会は、一昨年前より清水区梅ヶ谷にある三井住友建設の水道事業、建設業の魅力発信のインフォメーションセンター「しずみいランド」で、近辺の小学校の児童に水の不思議を興味深く伝える環境教育講座を行いました。送水管、配水管の工事が終わるまでの約1年間でしたが、千人を超える方々に参加いただき、小学生や大人に水辺保全の意義に関わる啓発活動を実施できました。

この活動が静岡市より高い評価を得られたこともあり、今年度の工事現場でも同様の提案や活動をして欲しいという要望を受けました。その工事は静岡市広野地区浸水対策事業の広野3号雨水幹線外築造工事になります。広野地区は近くを流れる丸子川を天井川として抱えていることで大雨の際に街が水で溢れてしまう内水氾濫を起こしやすい地域となっており、度々街が水に浸かる被害を受けているため、街に水がたまらないよう新たに雨水管を地下に通し内水氾濫の被害を軽減するための工事になります。この工事の概要や内水氾濫のしくみなどをわかりやすく伝えることに加え、当初からの目的である浸水対策・建設業の魅力発信また、担い手確保・育成の取り組みのひとつとして、私たちの環境教育活動が求められています。

どの分野でも人材不足が深刻化している昨今、社会資本整備を担う行政や建設業も例外ではありません。若い技術者を育成するためにまず、自然現象に興味を持ってもらう必要があります。その架け橋となるのが私たちの行う環境教育です。

2. 事業内容・方法

私たちの行う事業では、具体的に以下のことを行います。

- ・長田南小学校児童クラブの子どもたちへの環境教育

ここでの環境教育は「水の不思議な現象」をテーマに体験型学習を意識し行います。子どもたちが自然現象に興味をもてるように実験形式やクイズを導入するなど様々な工夫を凝らすことで、難しい現象に対する抵抗感を払拭します。水の循環や表面張力などの身近なものからサイフォンの原理など少し難しい内容にもチャレンジします。

- ・子どもたちを対象としたアンケート調査による内水氾濫の理解度調査

2月12日水曜日に長田南小学校児童クラブへ最後の訪問があります。そこでは最終目標である「内水氾濫の理解」を達成するために自然体験活動研究会オリジナルの劇を披露します。その劇の前後に子どもたちを対象としたアンケートを行います。内容は内水氾濫の原理や仕組みを問うものです。前後に同じ内容の質問をすることで、劇を活用した環境教育によ

り難しい現象でも子どもたちが理解できることを明らかにします。また同時に大学生による環境教育を子どもたちがどう捉えていたかの質問をし、どれくらいの割合の子どもたちが環境教育を求めているかも明らかにします。

3. 事業成果

今回の事業で長田南小学校児童クラブの子どもたちに教えることのできた「水の不思議な現象」は、水の循環、水圧、表面張力、サイフォンの原理、水笛の合計4つです。どの回も子どもたちは眉を上げ興味津々に私たちの話を聞き、楽しそうにプログラムに取り組んでいました。例として、5月に行われた工事現場見学会にて水の循環と水圧のプログラムを行いました。子どもたち自身が水となり地球上の様々な場所を、サイコロを振って旅をしながら降り立った地点でビーズを獲得し、個々のオリジナルの配色のブレスレットを作りました。この水の循環プログラムでは、水が川や海、雲や生き物の体など色々な場所を旅していることを、体験をもって理解に結びました。また一円玉の上にスポイトからの水滴が何滴乗るかを予想し実際に試してみることで、水の持つ表面張力を自分の手で感じてもらうプログラムや、オリジナルのおもちゃ（図1）を使ってサイフォンの原理なども子どもたちに感じてもらいました。



図1 サイフォンの原理のおもちゃ

小学1～3年生の低学年がほとんどの児童クラブにも関わらず、ほぼ全員がこれらのプログラムを自分なりに理解した様子が見られ、環境教育がいかに子どもの理解へ寄与しているかを実感することができました。

4. 今後の展開

今回の事業で行った内容は広野3号雨水幹線外築造工事の紹介パンフレットに新たに掲載する予定であり、地域の住民を中心にこれらの活動を広報していきます。そのパンフレットから内水氾濫の危険性や企業や行政が行っている対策内容も同時に啓発していくことで、市民の防災意識を高めると共に建設業のイメージアップを図り、将来の担い手確保に繋がれば良いと考えています。また私たちの環境教育が希薄化する子どもと自然との関係を結びつけるきっかけになり、自然と人間社会の共存を志す大人へ成長してくれることを願っています。



図2 水笛作りの時の児童の様子

石部棚田の魅力をぎゅぎゅっと伝え隊

浅見ゼミ：榎本優吾（代表）、相澤嘉希、大間清賀、鎌田鎮治、
鬼澤陽人、塩川純也、白松知紀、田邊菜々子

1. 目的・概要

常葉大学と松崎町は包括連携をしており、松崎町と密接な関係があるという利点を生かそうと考え、石部の魅力を県内外に広めるために活動を行った。石部は観光資源として棚田を持っている。石部棚田は他の田んぼとは違い農薬や化学肥料を使っていないため、水質汚染に弱い水生昆虫が多く生息しているなど生物多様性に富んでいると考えた。また、石部は近くに海があるためそこにも石部が誇る何かがあると考えた。そのためこの事業では、石部棚田に生息する生物の調査（生物調査）と石部の海に生育するひじきを対象に調査（地域調査）を行い、その結果をパンフレットにまとめた。

また生物調査では、学生ボランティアにも手伝ってもらった。学生ボランティアは社会環境学部生の「ふじとこ伊豆プロジェクト」に参加していた学生である。この学生ボランティアの方々には、10月に石部の公民館を借りて生物調査での確認種など中間報告をした。

2. 事業内容・方法

生物調査：石部棚田に生息する、両生類、水生昆虫、トンボを主に調べた。調査期間は、5～10月の間で月に1度調査をした。調査方法は、任意採取法による捕獲をした後、図鑑を用いて捕獲生物の同定を行った。

地域調査：石部のひじきを対象に、地域の人から聞き取り調査を行い、採取場所を見学した。その後文字起こし、情報を整理した。さらに聞き取りの内容と気象庁の干満のデータを照らし合わせた。内容から、ひじきの採取時に関する条件についての推測をした。

3. 事業成果

生物調査では、両生類4種、水生昆虫7種、トンボ10種、合計21種を確認、同定した。また、兵庫県立「人と自然の博物館」でアクリル標本作成の手法を学んだ後、トンボのアクリル標本を作製した。この標本は、石部に生息しているが、子供たちが観察する機会が少ない生物をよく観察してもらいたい、生物の特徴を実際に目で確認してほしいという気持ちで作った。

地域調査では、石部のひじきについて聞いた。石部には生育場所が4つあることやひじき採取の時期、採取の日の決め方、生育場所などひじきについて聞いた。実際に採取場所に連れて行ってもらったことをきっかけに、自分たちで気象庁の干満のデータを調べ、図にまとめてそこから求められる結果と聞き取りの内容から採取日の条件を割り出した。さ

らに、自分たちが食べている乾燥ひじきの作り方や乾燥ひじきを作る時に使う道具について教えてもらった。

4. 今後の展開

今回の生物調査で確認した種は21種だった。しかし、まだ確認されてない種がいる可能性があること、両生類が活動を始める早春(2~3月)から調査を行えなかったこと、もっと長い期間をかけ月に複数回の調査したほうが良いことの3つが課題としてあげられる。また、今回は両生類、水生昆虫、トンボを主に調査をしたが、棚田の生物と関わりがある植物や、調査対象外の生物も多くみられたので、それらについての調査を行うべきだと。さらにアクリル標本はきれいに作れたものが少ないこと、水生昆虫なども見て欲しいため製作したほうがより良い成果に結びつくのではないかと考えた。

地域調査では、ひじきの採取についてまとめた。しかし、ひじき採取において大きなイベントであるひじき狩りが3~4月の時期であることから調査できていないこと、ひじきが1年でどのように成長するのか、ひじきを煮る際に使う薪についてはどのくらいの量が使われているのか、などの3つが課題としてあげられる。薪は石部の森から採取してくることから、海での人の活動と森とをつなぐ情報として把握したい。今回まとめた調査内容にこれらの情報を加えることで、石部のひじきの1年のサイクルや潮位との関わり、石部の海と森の関係が分かり、石部の魅力として発信できるのではないかと考える。

西里村まるごとエコミュージアムプロジェクト第2期

所属：小杉山 晃一ゼミ

社会環境学部 大久保 実紗（代表）、大石 かおり、北 彩乃、望月 咲見、佐塚 裕貴
上田 陽、吉澤 佑梨、前林 諒哉、渡邊 稜人、鈴木 萌生、米山 輝

1. 目的・概要

清水区西里地区は、旧清水市の森林公園として多くの市民に親しまれてきた。自然環境のこれ以上の劣化を防止し、生物多様性を保全する社会を構築することを大きな目標としている小杉山ゼミでは、この西里地区を野生生物との共生モデル地区とすることを考えた。昨年、来訪者が散策しながら、あらゆる場所で野生生物の生態や自然の仕組み、あるいは自然を生かした農林業を学ぶための宿泊型博物館などを計画したが、今年度は博物館のさらなる改善と地域の小学生を交えたイベントを行った。

2. 事業内容・方法

①西里ビオトープリノベーションプロジェクト

ビオトープ（生き物が棲む空間）の改善作業を地域住民や市民と協働して実施した。昨年度に続き、繁茂しすぎた水草の除草、浅い止水の水辺の創出、ホダ木積み等を行った。

②常葉大学教育学部附属橘小学校と連携した親子自然体験教室

常葉大学教育学部附属橘小学校の1年生から6年生までの児童を対象に、生物多様性を伝える新しいプロジェクトとして、学生が考案した自然体験教室を実施した。

③環境調査：カブトムシ養殖のための最適な苗床の調査

以前から環境教育に用いる材料としてカブトムシの苗床を作っていたが、年ごとに数は減少した。今年度は苗床の材料によるカブトムシの捕獲数の比較を行った。

④古民家を利用した宿泊型博物館

昨年度に引き続き生物多様性の大切さを多くの人に知ってもらうために、地区内にある「安来里」に博物展示を実施し、宿泊型博物館として情報発信の拠点とした。今年度は小学生にもわかりやすいポップや地区内にいるカエルを用いたキャラクターを作成し、より自然と親しみやすくなる提案を実施した。

3. 事業成果

①西里ビオトープリノベーションプロジェクト

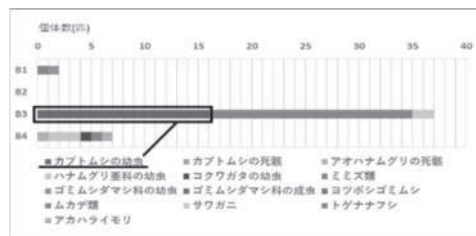
イベント参加者と協働し、冬季でも湛水する湿地の造成やカエル類が越冬に利用できるエコスタックの造成、繁茂しすぎた抽水植物の除草を行ったことで、新たな環境を創出でき、環境改善も行うことができた。



昨年作成したカエルビンゴの実施、生物のスケッチ、昆虫標本づくりを行った。イベント後に行ったアンケートの結果、本イベントを通して子供たちの生き物に対する関心をより高めることができたことが分かった。また、本イベントで作成した昆虫標本は橘小学校へ寄贈した。



子供たちがより自然と親しみやすくなる材料として、環境教育の際にカブトムシを利用できないかと養殖を試みた。苗床に使用するホダ木や木くずの質を変え調査したところ、カブトムシが好む苗床の傾向が明らかとなった。



昨年度「人と自然との共生」をテーマに、西里の自然、農業、暮らしにまつわる展示を行い、古民家を博物館化した。今年度は環境省から小学生でも読めるような記事を抜粋し、さらに目を引くようなポップの作成を行った。また、宿泊者に地区内の自然に興味を持ってもらえるように、地区内に生息する動物の生態を簡潔にまとめた教材（「動物カード」と「動物ぬり絵」）の作成と、今年度設置された「カエル王国看板」に記載されている9種のカエルがより親しみやすくなるようにそれぞれのカエルをキャラクター化した。



今後、さらに発展させるための試みとして、博物館展示について実施に至れなかった意見が多数あるので、それらを改善、実施に至る必要がある。地区内の自然については、これまで蓄積してきた環境調査を毎年継続して記録すること、さらにミヤマカワトンボを指標生物として地区内の豊かさを測り、近隣住民や市民の方たちにより具体的な情報を届け生物多様性について興味を持ってもらえるよう努力していきたい。

ここはお茶物語プロジェクト

—お茶農家とのコラボレーションによる児童文化財を用いたお茶文化の継承—

所属：保育学部 稲垣ゼミ 2 年

保育学部 山本英実（代表）、萩田笑奈、佐野晴菜、青島莉子、赤池萌々夏、
熊谷美那、樽林ゆい、小山佳純、白鷺杏純 芹沢岬、西村実桜、古屋乃蒼、
丸山結加、山田さくら



1. 目的・概要

本プロジェクトの目的は、児童文化財を用いた静岡のお茶文化の継承である。静岡県は 2016 年 12 月に全国初の「小中学校の児童生徒の静岡茶の愛飲の促進に関する条例」を制定した。これは子ども時代から静岡茶に親しむことで地元への愛着を深め、それが地元の産業を支えることにもつながっていくという発想であり、小中学生を対象としている。そこで今回条例に含まれない、小学校就学前の子ども達を対象に、お茶に親しみ、地域のお茶文化を含めた地域への愛着を持てるよう、静岡県に残る昔話や民話を題材にした絵本や影絵などの児童文化財の作成とそれを用いた活動を行う。幼少期からお茶に親しみ、地元への愛着につながる静岡ならではのお茶文化の継承を目指したい。さらに私達自身も地元に貢献できる保育者としてあるべき姿について考える機会としたい。



2. 事業内容・方法

静岡県は、牧之原・安倍川・大井川・天竜川流域の山間部など 20 を超える産地を有する日本一の茶どころであり、お茶文化は私たち静岡県民の誇りでもある。しかし過疎化が進む一部の生産地では、生産者の高齢化や担い手不足、食生活の多様化により、栽培を諦め荒れ放題となった茶畑を目にすることも珍しくない。平成 29 年の 1 世帯当たりの支出金額では、茶飲料が緑茶リーフの 1.62 倍であり（静岡県お茶白書, 2018）、消費者である私たちにとっても、「お茶」とは大手メーカーによるペットボトルのお茶をさすようになっていく。若い世代を中心としたライフスタイルの変化に伴い、祖父母や親世代がゆっくりと急須に淹れたお茶を楽しむような、お茶文化を失いつつある。これはお茶を育てる茶農家の減少のみならず、静岡県ならではのお茶を取り巻く地域独自の文化が失われていくことでもあるのではないかとこの危惧を抱いた。そこでお茶文化を継承する意義を再認識し、次世代へとつなげていく活動を行うことは、将来子どもを育てる保育者の卵として意義深い

のではないかと考えた。

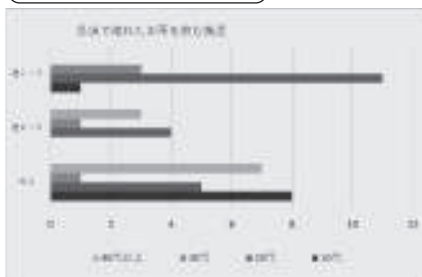


本事業では以下の3つの事業を実施した。

- 1) お茶農家が点在する地域へのフィールドワーク
現地視察と調査、お茶農家との会議を実施した。
- 2) 学園祭での出店とアンケートの実施…11月の心薙祭にお茶農家との
コラボレーション商品を開発、販売した。
- 3) 児童文化財の作成とお茶文化教育の実施

昔話の文献調査の実施。「だいだらぼっち」など、静岡のお茶にまつわる昔話や民話を題材に、影絵を作成した。静岡市内の子ども園で披露、お茶文化教育を実施予定（3月）。

3. 事業成果



アンケート協力者の97%がお茶を好んでおり、若い年齢層も急須で淹れたお茶を楽しむ頻度は高いことがわかった。またお茶農家とのコラボ商品（2種類）も年齢、性別によらず高い評価を得



た。調査結果から、お茶が身近にあって当たり前のものであるからこそ、その良さや価値を改めて認識する機会がないし、必要性を強く感じないのではないか、と推測された。

そこで子ども達に対してお茶文化を広める活動として、児童文化財の作成に取り組んだ。まず影絵劇団いちばん星による影絵講習会の実施やいちばん星25周年記念公演にボランティアとして参加して、影絵の繊細な作業や上演手順を学んだ。その学びを生かして、児童文化財として、静岡の茶畑を舞台としたオリジナルの影絵劇を作成し、保育園で試行的に上演を行った。一部幼児に分かりづらい箇所があったため修正を行い、静岡市内の子ども園、子育て支援施設で上演する（3月）。



4. 今後の展開

本事業を通して、未来を担う子どもたちに関わる仕事を志す私たちは、子どもたちの成長を支え守り育てていくことと、子どもたちが生まれ育つ地域を理解し、その良さや価値を守り維持していく役割も同時に負っているのだということを再認識した。お茶文化は静岡が持つ魅力の一つであるが、今後も影絵劇等を通したお茶文化教育のみならず、地域の持つ魅力を発信していけるような活動を続けていきたい。

子どものあそび広場

所属：村上博文ゼミ

保育学部 津村明日香(代表)、新庄玲奈(代表)、松永実歩(会計)、他村上ゼミ 1～3 年計 30 名

1. 目的・概要

本プロジェクトでは、清水駅前銀座商店街にて毎月第 3 日曜日に開催されている「銀ぶらマルシェ」にて、家庭や保育施設等ではあまり見られない、イタリアやスウェーデンなどで注目されている光を中心に五感をフルにつかったあそびの広場をつくります。具体的に本プロジェクトの目的は以下の 3 つになります。

- ① 子ども：光を中心に、五感を使い普段あまり触れられないあそびを楽しむ
- ② 保護者：光を中心としたあそびを通じて、子どもと保護者がともに楽しむ機会を提供する
- ③ 地 域：商店街の活性化に向けて、保育という立場から参加する

2. 実践内容・方法

本プロジェクトでは 6 月、11 月、1 月の 3 回にわたって清水駅前商店街にて、子ども向けのあそび場をつくり、活動を実施する。

〈対象〉銀ぶらマルシェを訪れた親子等約 30 名〈準備〉商店街の担当者の方に事業計画書を提出する。同時に参加者は、らくがき、つみき、ひかりのコーナーに分かれ、事前学習などを行い、子どもが安全に使うことができるかどうか確認しながら素材集め、研究、作成を行う。また、各コーナーの配置などの環境構成を検討する。

① 6 月 16 日 2019 年度第 1 回子どものあそび広場

らくがき広場コーナーでは、約 2 メートル四方の模造紙に、子どもたちが全身をつかって絵を描ける場を提供した。子どもたちは普段捨ててしまうような廃材や野菜のヘタなどを使い、思い思いの表現を楽しんでいた。つみきの街コーナーでは、カプラ(積み木)を保護者とともに積み上げたり、子ども 1 人で工夫して遊びこんだりする姿が見られた。ひかりのコーナーでは光を映し出すライトテーブルや OHP にアイスクューブやカラーセロハンなどを置いて、色や影を楽しむ様子が見られた。



② 11 月 10 日 2019 年度第 2 回子どものあそび広場

第 2 回子どものあそび広場では、コーナーは大きく変えず、第 1 回目の反省点を踏まえさらに子どもたちと保護者が楽しめるようなあそび場を作成した。大きな特徴として、らくがきコーナーでは秋の自然物を利用して、制作物をつくるコーナーを設置した。そこで

子どもたちは保護者とともに好きな素材を選び、作品を作っていた。ひかりのコーナーでは、新たにアクリルケースを取り入れ、普段あまりできない光とお絵かきのコラボレーションに夢中になり取り組んでいた。



③ 1月19日 2919年度第3回子どものあそび広場

第3回目では、事前学習で学んだ〈匂いのあそび〉をテーマに、らくがき広場に木の实や花、コーヒーの粉などを用意し、自由に好きな匂いを組み合わせて作るコーナーを設置した。そこで子どもたちは触ったり、嗅いだり、五感をつかって自分だけの香りを作っていた。ひかりのコーナーではアクリルケースの使い方を工夫し、ひかりのテーブルの上で砂あそびができるコーナーを設置した。ただの砂あそびではなく、光を通した砂の色味や、ブラシや刷毛で絵を描く様子が見られた。



3. 事業成果

今回の「子どものあそび広場」における事業成果は以下の3つの視点から考えられる。

まず1つ目は、子どもたちにとっての視点である。今回の活動によって、あそび場が失われつつある子どもたちに、様々な世代が集まるあそび場と普段は味わえないようなあそびを提供できた。実際に子どもたちは、その場にいる子どもや保護者と関わりながら目を輝かせてあそび込んでいた。

2つ目は、保護者にとっての視点である。活動を通して、保護者に子どもの新たな姿を発見してもらうことができ、さらにあそびの豊かさを知る機会を提供できた。実際に、あそび広場の感想を書いてもらうコーナーを作ったところ、「普段あまりできない遊びに、子どもだけでなく大人も楽しめた」や「子どもがこんなに夢中になっていたから、家でも取り入れてみたいと思った」などの感想が寄せられた。

3つ目は、地域にとっての視点である。なかなか子どもたちが足を運ばなくなってしまった商店街に、子どもたちが集まり、そこで夢中になって遊べる場を提供できた。商店街の銀ぶらマルシェ担当者の松岡さんにお話を伺ったところ、「清水駅前銀座商店街を、目的があるから来るのではなく、目的なしに来て、そこで様々な人やものと出会えるような空間にしたい。これからも活動を続けていってほしい。」といった言葉をいただくことができた。

4. 今後の展望

本プロジェクトの今後の展望として、引き続き子どもたちのあそび場をつくり、清水区内だけではなく、静岡市全体から人が集まるような活動に広めることを目指していく。それによって子どもや保護者が集まり、さらに商店街が活性化していくのではないかと期待している。

清水の魅力を観光客・外国人に伝えるマップ制作プロジェクト

造形学部 森下 実華（代表）、荒石 磨季、杉山 弥鈴、渡辺 拓真、渡邊 聡美、澤木 海風、
高橋 礼華、田代 結花、近藤 向南、森下 雄介、山田 美楓、前川 芽久
横浜国立大学 渡辺 武瑠、西藤 悠馬、一居 成

1. 目的・概要

このプロジェクトは清水の地域資源のブランディングを通して地域の活性化に貢献することを目的とした取り組みである。魅力ある地域資源の一つとして「清水次郎長」を取り上げた。次郎長の歴史を継承し、次郎長通り商店街ににぎわいを創出する手段として、マップを制作・配布した。

現在、清水の市街地を訪れる観光客はエスパルスドリームプラザを中心とする臨海地域に集中している。また、クルーズ船に乗ってやってくる外国人観光客の多くは、下船後、大半が県内の他地域にバスで移動してしまう。一方、臨海地域から徒歩圏内にある次郎長通り商店街にはあまり観光客が見られない。臨海エリアと商店街をつなぐ導線を生み出し、地域経済を活性化すべく、次郎長通り商店街周辺に特化したマップを制作した。

2. 事業内容・方法

次郎長通り商店街の飲食店や雑貨屋などの店舗の中から、観光資源となりうる店舗を選出し、個々にインタビューを行い、営業情報を収集した。また、得られた情報をもとに店舗の特徴・魅力を伝える文章を制作した。店舗情報の他に、地域の中にある歴史的建造物や次郎長の歴史に関する紹介文を加え、マップ上に記載した。また、マップのデザインも全くオリジナルに行った。

マップの制作は、2段階で行った。まず、第一段階の日本語版を2019年10月14日に歴史的建造物である日の出倉庫街を中心会場として行われたイベント「ミナトブンカサイ」（主催：ミナトブンカサイ実行委員会）において来場者に配布した。また、日の出倉庫街エリア～次郎長通り商店街を巡るガイドツアーを実施した。（当日は大型客船が寄港する予定で、外国人向けの英語によるガイドも企画していたが、前日までの台風により、寄港が中止となり、「ミナトブンカサイ」来場者向けの日本語ツアーのみとなった。）

次にこれらでの意見を踏まえ、使いやすさ、見やすさ等の改善を行い、決定版を制作するとともに、英語版を制作した。英語版は、単に日本語を訳しただけでなく、日本の一般的な市民生活を気軽に見られるという観点に気をつけた。

また、株式会社 Otono、経営学部小豆川ゼミによる多言語の音声ガイドと連携した。音声ガイドのQRコードをマップに添付し、観光客が人のガイドに頼らずに自由に観光することができるような仕組みとした。

3. 事業成果

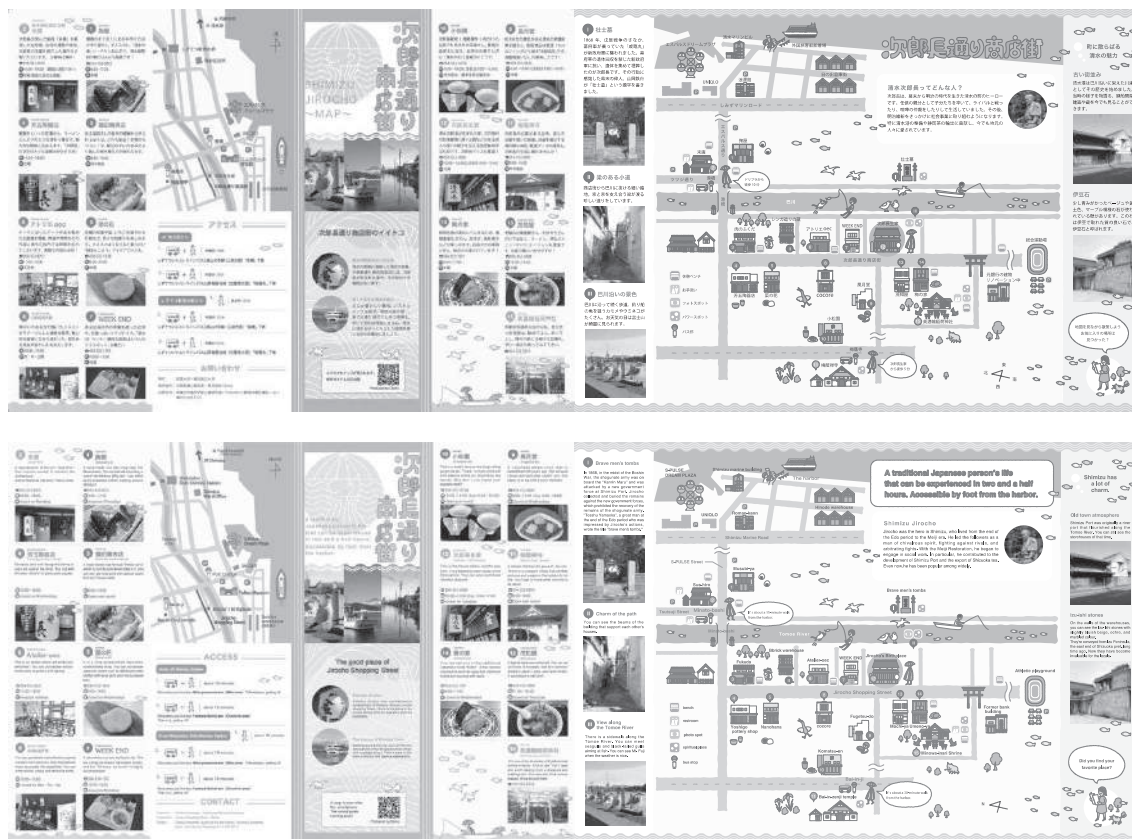
商店街の情報を集約することができた。現在清水の観光案内所や商業施設で配布されている観光マップにおいて、次郎長通り商店街周

辺に重きを置いたものは他に存在しない。

また、「ミナトブンカサイ」のガイドツアーでは数十名の参加者を募ることができた。次郎長通り商店街の知名度を向上させ、日の出倉庫街や次郎長通り商店街の地域資源が持つ魅力についても発信することができた。

4. 今後の展開

今後はマップを日常的に利用してもらえるよう、利用・普及に努めたい。英語版も客船入港時等に、定期的に配布できるとよいと思う。今回の取り組みは、次郎長通り商店街周辺の地域資源や店舗の魅力を観光客に対して発信することを目的としたものであった。マップを手にして商店街を訪れる観光客が増加し、その様子を見た地域の方々の中から、商店街において新たな取り組みに挑戦しようとする人が現れるのではないだろうか。観光客の視点から地域を見つめなおし、魅力を再発見する機会となればうれしい。



上：日本語版、下：英語版 左：外側、右：内側 観音開きで地図と店舗紹介が対応する



ミナトブンカサイにおけるガイドツアー 日の出倉庫街～次郎長通り商店街（2019年10月14日）

北街道プロデュース計画

所属：ミズオチ交流会 代表者：櫻井允人

1. 企画の目的

<ミズオチ交流会の概要>

ミズオチ交流会は学生の視点で地域や大学周辺の商店街の活性化を目的として活動しているサークル。部員は70名弱で構成され、商店街の方々との話し合いに参加し、学生の視点から商店街活性化を考える。

月に4回の定例会を開き、イベントの企画や運営について意見交換を行っている。今年度から部員の増加に伴い、水落祭、商店街、広報と3つにグループを分けて活動を行っている。

<企画の目的>

常葉大学、ミズオチ交流会は学生の視点で地域や大学周辺の商店街活性化を考え、活動している。ミズオチ交流会として年2回行われる商店街のイベントに学生のブースを出し参加していて気づいたことは、イベントを開けば地域の子供たちや親が来て楽しんでもくれるが、イベントが無い日は、学生たちは通学路として通るだけで買い物や食事等の目的で商店街を使う人が少ないことが分かった。

また、昨年10月に行った学生有志により大規模なイベントを開催したが協力していただいたアンケートの中で「活気がない」、「通行人が少ない」「シャッターが閉まっているところがあり寂しいイメージ」など様々な課題が浮き上がった。そこで、私たちは今回のプロジェクトを通して毎年7月に行われる「七夕バザール」と10月に学生有志で行われた「ハロウィンイベント」をミズオチ交流会主催で大規模に行おうと考えた。

その一環として高校生も参加してもらうことで（高大連携）より広年齢の若者の参加を促す。この2つのイベントを通して北街道の回遊を高め、商店街を知ってもらい商店街の活性化や商店街と学生をつなぐ架け橋とし、北街道の街をプロデュースしたい。またアンケートを取り、結果を次回以降のイベントに生かし、これらの活動を一度きりとすることなく継続的に行うことで北街道だけでなく商店街全体の将来を見据えるためのきっかけとしたい。

2. 事業内容・方法

（1）7月6日（土）市民会館前商店街にて七夕バザール開催

商店街の歩道を使用し、ボウリング、スタンプラリー、腕相撲マシーン、ボール当て、輪投げといった5つのブースを出した。

（2）10月26日（土）常葉大学文化祭「水落祭」にて、お化け屋敷開催

3. 事業成果

a. セタバザール

参加者（お子様）：49 名

結果はミズオチ交流会のメンバーは勿論、商店街の方々や常葉高校、水落キャンパス事務といった沢山の方々の協力もあり、当日は天候不良にも関わらず、多くの人に参加して頂いた為、これ以上ないほどの成功を収めることができた。

b. お化け屋敷

参加者：114 名

常葉大学水落校舎敷地内の建物（2 号館）を借りてその中にお化け屋敷を設営して開催した。また、商店街の方にも小規模だが、射的のゲームコーナーを設けた。そちらも 40 名弱と多くの方に来ていただき、全体的に年齢層は年少から高校生、大学生まで幅広いお客様に楽しんでいただいた。

4. 今後の展望

イベントを開催することによって、集客効果があることは確認できた。また、アンケートにより交流会が独自で行っていた過去のイベントを知り、リピーターとなっていていただく方々もあり、商店街に興味を持ってもらう効果もあると分かった。

長期的にイベントを開催していけば、商店街に興味を持つ方が増えることが期待でき、商店街の活性化にもつながると考えられる。

チラシを見て来ていただいたお客さんも多かったことから、宣伝効果は十分にあったと言える。

今回の成果から、今後はより効果的なチラシ配布、イベント改善を図っていきたいと考える。ただ、アンケートの中で私たちのミズオチ交流会という名前を認知していなかった方が多かったので、知名度アップも図っていききたい。

学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒へのセミナー事業

所属：AT サークル CATS

健康プロデュース学部心身マネジメント学科 寺田一成

1. 目的・概要

日本スポーツ振興センターの調査では、高校における熱中症発生時の活動別割合は、運動部活動 69.46%、体育活動 3.45%、体育祭 6.17%、その他 20.92%と、運動部活動での発生が圧倒的に多く、重篤な場合には死亡事故につながっている¹⁾。

熱中症に対する予防措置を講じ、適切に対処するために正しい知識を身につけることは、運動部活動に参加している高校生に必要なことと考える。

本事業では、私たちが大学で学んでいる、熱中症に関する知識や救急処置の方法を伝え、それらを身につけてもらい、運動部活動中の事故減少に貢献することを目的とする。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の4つの内容を実施する。

① 運動に関する暑さ指標（WBGT）と熱中症の解説

「熱中症」という言葉は知っていても、原因、重症度レベルや症状等について詳しく知っている人は少ない。例えば、WBGT（Wet Bulb Globe Temperature：湿球黒球温度）という熱中症に関する暑さ指数があり予防に使えること。熱中症は熱失神、熱痙攣、熱疲労、熱射病の4つ分類され、それぞれ病態が異なること。さらに熱射病は命に危険を及ぼすことが想定されることなどを理解している高校生は少ないと思う。

①では、熱中症を予防しながら、発生時には適切に対処するために必要な知識を身につけることを目的とする。

② 重症度レベルに応じた対処法の実践

スポーツ現場において熱中症が疑われる傷病者を発見したとき、知識や技術を有していても、適切な救急処置を実施できないバイスタンダー²⁾は多い。

②では、実際にあった熱中症事故を取り上げ、部活動の環境や経済面などを考慮した“対処法”を実践する。例えば、氷を大量に確保できない状況の場合、氷水で濡らしたタオルをたくさん用意し、それらを全身にのせ、頻繁に取り換えながら、うちわで全身をあおぐとともに、氷やアイスパックなどを頸部、腋下、鼠蹊部など太い血管が通っている部位に当てて追加的に冷却する。

¹⁾ 体育活動における熱中症予防 調査研究報告書（独立行政法人日本スポーツ振興センター）H26年3月

²⁾ バイスタンダー：救急現場に居合わせた人（発見者、同伴者）のこと

以上のように、事例をもとに実技を行うことで実践力を培うことを目的とする。

③ 最悪の場合を想定した救急処置の実践

熱中症レベルの最も高い「熱射病」が疑われる場合、40度以上の高体温で意識障害の症状があるため、命に危険を及ぼす³⁾。迅速な判断と指示、行動が求められるなかで、正しい1次救命処置(Basic Life Support)を行えることが重要となる。

③では、救急処置の方法として、反応の確認→119番通報→AED手配→呼吸の確認→心肺蘇生という流れを説明し、“傷病者を目の前にしている”という緊張感をもって練習することによって、冷静に救急処置を行えるようになることを目的とする。

④ 熱中症予防をテーマにしたグループ・ディスカッション

①～③の学びを通して、所属する部活動ではどんな予防策が考えられるのか、それぞれの施設・設備や経済的な面などを考慮したアイデアを提案してもらう。

熱中症に関する知識やBLSを身につけ、現場で即した予防策を参加者自身が考えることで、運動部活動中の事故減少に貢献することを目的とする。

3. 事業成果・考察

参加者は1回目6名、2回目11名(保護者5名含)の計22名であった。

学内外でのチラシの配布やSNSでの配信、オープンキャンパスでの呼びかけをしていたが、想定していた参加者よりも少数であった。

学外での直接的な呼びかけをしていくことが必要だと考える。

WBGTを知っているか質問したところ、全員が「知らない」と回答した。また、熱中症の分類も、「初めて知った」という参加者が大半であった。

心肺蘇生法の胸骨圧迫では、「思ったよりも疲れる」や「大変だ」という感想が聞かれたが、これらの事は体験しなければわからないことである。

このセミナーで熱中症の原因や症状、対処法や予防法について、“知らない”が多くあり、それらが重要な知識であるということを実感してもらえたと思う。

4. 今後の展開

1. 夏場の暑熱環境は、今後も悪化していくことが考えられるため、本セミナーを継続して開催する。
2. 熱中症の発症時期を考慮して、6月頃の開催を検討する。
3. 学校現場に出向いての開催を検討する。



³⁾ スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック(公益財団法人日本スポーツ協会)

アスリートのためのサポ飯 -腹が減っては勝負は出来ぬ-

所属：健康プロデュース学部 健康栄養学科 食プロデュースサークル

酒井郁矢（代表）、稲葉朝香、大石綾香、大石美月、大橋佑佳里、小池由梨亜、羽入桃花
松村佳樹、富田直樹、中尾幸太郎、食プロデュースサークル有志

1. 目的・概要

自身の経験から、運動部に所属する高校生は、自分の適性なエネルギー量や不足しやすい栄養素を知らない者が多く、学ぶ機会が少ないと感じていた。そのため、私達がこれまでに学んできた食に関する知識を活かし、運動部に所属する高校生を対象に適正なエネルギー量や不足しやすい栄養素について学ぶ機会を設けたいと考えた。

今回は昼食（弁当）に着目し、高校生自身が簡単に作ることができる料理のレシピ（サポート飯：サポ飯）を考案し、パンフレットを作成した。作成したパンフレットを用いて、講話と調理体験を含めたセミナーを実施した。座学と体験、試食を通し、自分の適正なエネルギー量と食に関する知識を深め、実際の食生活に結び付けることを目的とした。

2. 事業内容・方法

ゼミなどで交流のある高校に協力を依頼し、了承が得られた静岡県内の3つの高等学校を対象とした。A高は男子サッカー部、B高は男子野球部、C高は男子バスケットボール部である。

①レシピの作成

レシピの作成は「高エネルギー・高たんぱく質」、「冷凍食品の活用」、「作り置き」をテーマとし、計14品のレシピを考案し、試作を行った。また、完成したレシピを掲載したパンフレットを作成し、パンフレットの冒頭では1日に必要なエネルギー量や不足しやすい栄養素について解説した。

②セミナーの実施

セミナーは90分で行い、始めの20分を講話、その後50分を調理体験、残り20分で試食とアンケート記入の時間とした。講話では食生活に関する知識のほかに、現在の自分の体格を知ってもらうためにBMIの計算を行った。調理体験では、パンフレットに掲載したレシピを用いて高校生が5人班となり調理を行った。サークルメンバーは各班に1人の割合でサポートを担当した。弁当箱に詰める主食（ごはん、パンなど）、主菜（肉、魚、卵などを主とした料理）、副菜（野菜を主とした料理）の割合を3・1・2弁当箱法（NPO法人食生態学フォーラム）を用いて説明した。

今回、A高とC高には1回のセミナー（講話と調理体験）を実施し、B高は監督の要望があり講話とセミナーを別々に実施し、調理体験を2度行った。

③アンケートの実施

これまでの食に関する講話の受講経験、今回のセミナーの理解度、満足度などについて、セミナー実施後に無記名のアンケートを実施した。

3. 事業成果

表 1. セミナーの概要

高校	日程	時間	人数
A 高男子サッカー部	12/11（水）セミナー	16：30～18：00	22 名+指導者 2 名
B 高男子野球部	12/13（金）講話	16：30～17：15	27 名+マネージャー4 名+ 指導者 3 名
	12/23（月）セミナー	10：30～12：00	
	1/15（水）セミナー	16：00～17：30	
C 高男子バスケ部	1/14（火）セミナー	16：00～17：30	24 名+マネージャー2 名+ 指導者 2 名

アンケート結果より、今回のセミナーを受講し「食とスポーツの関係性」が大切だと考える高校生が多かった。講話については、回答者全員から「よく理解できた、理解できた」と回答された。講話の内容を高校生にわかりやすい内容にしたことで、高校生がこれからの食生活をイメージしながらセミナーを受講できたと考えられる。高校生からは「普段使っているお弁当箱よりもサイズが一回り大きい」、「食事を毎日お母さんが準備していることに感謝したい」などの声が聞かれた。



（講話の様子）

（調理実習の様子）

（詰めたお弁当箱）

4. 今後の展開

対象者はセミナーを受講したことで、普段の食生活を見直し、どのように改善するかを考える機会となった。また、栄養に関する知識を学ぶ以外にも、食事を用意する親の苦勞を知り、親へ感謝するなどのプラスの効果が生まれた。セミナーを実施することで、スポーツを行っている学生の手助けやヒントになり、私たちも将来の仕事に役立てることができると感じた。今後も継続して、様々な高校や対象者に「食とスポーツの関係性」を伝える活動をしていきたい。

Health for all people

～大人も子供もみんなで元気に～

所属:常葉大学 健康プロデュース学部 井口ゼミ 3年

渡部竜空(代表)、吉田涼馬、杉山雄飛、鈴木悠利、下山紗里、門ノ澤夏菜

1. 目的・概要

近年、急速な高齢化の進展と同時に要支援・要介護者の人口も増加し、我が国の深刻な社会問題となっている。高齢者が自立した生活を継続して過ごすためには、運動機能、日常生活活動、生活の質の維持・向上が必要である。こうした問題を解決するために我々は、地域との連携を行い、健康に対する意識の向上・健康の増進を目的とし、以下の事業を行っている。

2. 事業内容・方法

① 脳リフレッシュサロン志都呂・シトロンピック

シトロンピックとは、脳リフレッシュサロン志都呂に通っている要支援・要介護認定を受けている高齢者を対象とした事業で、6月と12月の2回にわたり体力測定(椅子立ち上がりテスト・片足立ちテスト・10メートル歩行・握力・ファンクショナルリーチテスト)である。これらの体力測定の結果を踏まえて、介護度別に施設での運動やレクリエーションを継続する効果を確認し、利用者に合致したプログラムを提供している。



② 健幸アンバサダー

健幸アンバサダーとは、健康に関する正しい知識などを身近な人に伝える健康の伝道師のことである。健幸アンバサダーの事業内容は、1. 健康づくり無関心層の行動変容の促し 2. 認知症やフレイル予防の理解促進 3. 生活習慣病・介護・重症化予防の理解促進 4. 自助・共助の強化、生きがいの具現化 5. 高齢でも社会的役割を維持することの理解促進 6. スマートウェルネスシティの理解促進（※自然と歩いて暮らすことが出来るまちづくり） 7. 疾病者でもスポーツ実施が可能であることの理解促進、これらのことを地域の方や、身近な方に伝えていくことである。



3. 事業成果

しとろンピックでは、6月と12月に実施した結果、身体機能が維持されていることが明らかになった。3年間の追跡調査の結果、バランス能力や柔軟性の低下がみられたことから、運動内容やレクリエーションの内容を改善する必要がある。

4. 今後の展開

今後の展開としては、2月13日の高齢者を対象とした「生きがいつくり運動教室」（都田協働センター）、子供を対象とした「めざせアスリート」、「しとろンピック」の継続調査を中心に活動していく。これらの活動を行う上で、健幸アンバサダーで学んだことを活かし、幅広い層の地域の人たちに、より健康に対する意識を高めてもらえるように活動を続けていきたい。

大学生による「自然災害時における自発的な行動の促進及びきっかけづくり」

所属：3.11 はままつ東北復光プロジェクト

経営学部 経営学科 3年 黒田慶司

1. 目的・概要

本プロジェクトでは、将来誰しもが経験する可能性のある自然災害について考え、災害発生時に自発的な行動のきっかけとなれるよう、学生主体のイベントを企画するものである。

具体的には、3月11日に浜松市中区アクト通りで行う3.11復光キャンドルナイト、街頭募金、浜松市立飯田小学校との共催イベント、近隣大学ボランティアサークルやNPO団体との共催イベントを行う。今年度は浜松市のハザードマップを活用し、立体的でわかりやすい図を作成する。イベントを通じて参加大学生、一般参加者は日本における自然災害の重大性を考え、学び、いざ災害が起こったとき自発的（自分が安全に行える範囲内）に動くきっかけをつくるものである。さらに近隣大学ボランティアサークル、NPO団体との共催イベントでは毎回アンケートを実施し、本当に必要な情報（企画）は何かを見極め、質の高いイベントとなるよう逐一改善する。また、これらのイベントで出会った他団体とネットワークを築き、災害発生時に素早く相互支援・情報共有できるような地域環境を構築する。

2. 事業内容・方法

《立体ハザードマップの作成》

浜松市のハザードマップ（津波・氾濫）を参考にして直感的で誰に対しても分かり易い立体マップを作成した。この立体ハザードマップは、浜松市立飯田小学校での児童向け防災活動で使用し、多くの児童が身の回りの自然災害について考えるきっかけとなった。

《共催イベント》

① 9月11日 Global Lab（聖隷クリストファー大学）

国際交流サークルGlobal Labと、在日外国人に対する災害時の理解向上を目的としてイベントを行った。実際に英語で災害情報を聞き、逆の立場に置かれている外国人に対し、どう指示すれば適切に行動してもらえるかグループワークを行った。

以下は参加者からの要望や改善案。

- ・リハーサルがあればより良いイベントが行えた
- ・話合いの時間が短かったが、話し合いは盛り上がり、それぞれの意見が交換できた。
- ・お菓子を早めに出せば交流にもつながった
- ・個人の一方的な発表ではなく、参加者が主体的に考えるきっかけが必要。

② 12月7日 HAP ハマガク（浜松学院大学）

防災系のサークルである HAP ハマガクとは、防災クイズや東北被災地訪問の報告会を行った。防災系の団体として情報交換やお互いの現状について話し合い、イベントの終わりには参加者へ防災豆知識入りクッキーを配布し、防災意識向上に努めた。

③ 12月10日 食プロデュース（常葉大学健康栄養学科）

健康栄養学科食プロデュースと防災食・避難食に関するイベントを行った。栄養面や作りやすさ、衛生面を考慮しつつ防災食をアレンジして食べやすくし、私たちの知らない避難食について知る機会となった。以下は非常食に関する参加者からのアンケート結果。

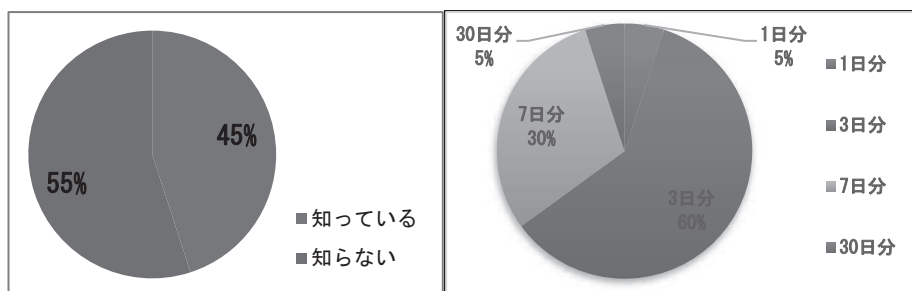


図 1：自宅にどのくらい備蓄があるか

図 2：非常食は何日分必要か

《地域の行事》

新都田フェスティバル・はるの産業まつり・キトルス祭・虚空蔵寺例大祭に参加し、団体や活動の広報やボランティア活動を行った。

《浜松市立飯田小学校防災体験活動》

浜松市南区にある飯田小学校で児童向けに防災体験活動を行い、当日は 100 名近い児童・保護者に対して自然災害の被害や備蓄グッズの紹介、プレゼンを行った。

3. 事業成果

共催イベントのアンケート結果から、災害に対する日ごろの備蓄や準備が個人によって差があることが明らかとなった。また学生内での防災に関する意見交換に需要があり、参加者の多くは防災に対して危機意識があることも明確となった。プロジェクトを通じて多くの市民・学生に自然災害について考えるきっかけを提供し、災害発生時に自発的な行動の第一歩となれるような活動になったと考える。

4. 今後の展望

2020 年 3 月 11 日には 1 年間の集大成とも言える第 9 回 3.11 復光キャンドルナイトを行うが、これまでの体験で学んだことを各自が活かし、それぞれの想いをもって活動に臨みたい。活動メンバーの中には東北被災地や熊本被災地、長野県被災地へ訪れた者もいるが、訪れていない活動メンバーも 1 年間の活動を通じて感じたことや自分なりの考えを参加する多くの学生、市民に伝えられるようにし、地域との関係づくりを深めていきたい。

南海トラフ巨大地震に活かす健康サポート支援に関する継続調査

所属：ThunderBirds 鈴木 南咲（健康プロデュース学部 心身マネジメント学科 4年）

1. 目的・概要

ボランティアサークル ThunderBirds は、健康鍼灸学科 SinQ との連携協働により、2016 年から毎年、熊本県益城町で「こころとからだの健康サポートプロジェクト」を継続実施してきた。昨年の健康サポートプロジェクトでは、93%から「とても良い」との評価を得ている。震災から3年を経過した現在、震災関連死は271人となり、今もなお仮設住宅で暮らす人は1万6千人となっている。更に災害公営住宅(2020年3月完成)の建設が着手されているが、被災者は新たなコミュニティ形成に不安を感じているとの声を聴いている。朝日新聞(2019)の調査では、被災者の76%が何らかの不安や問題を抱えているとの結果が出ており、継続支援の必要性を感じている。

本プロジェクトでは、熊本での健康サポートプロジェクト支援活動を継続実施すると共に、被災者の健康に対するアンケート及びインタビュー調査から過去2年間の比較を行い、近い将来起こる可能性の高い南海トラフ巨大地震に活かすことのできる健康サポートの在り方を明らかにすることを目的とする。

2. 事業内容

こころとからだの健康サポートプロジェクト/現地活動内容

① SinQ ブース

利用者：71名（2日間延べ人数・テクノ50名・小学校21名）

仮設住宅の住民を対象に、もみほぐしや足湯を行った。

施術を行いながら震災当時の様子や健康上の悩みなどを聴いた。（写真1）



写真1：SinQ ブース

② TOKOHAMA カフェ

利用者：136名（3日間延べ人数・テクノ46名・小学校90名）

益城町テクノ仮設団地で2日間、カフェを開設し、健康サポートBOOK、静岡茶と静岡のお菓子を提供した。住民同士の憩いの場を作ることができた。（写真2）



写真2：TOKOHAMA カフェ

③ 広安西小学校

3日間にわたり、2年生の授業サポート、登校の見守り、環境整備を行い、2日目の放課後には1～3年生の希望児童約90名に対しピカピカどろだんご教室を行った。（写真3）



写真3：ピカピカどろだんご教室

3. 事業成果

アンケートおよびインタビュー調査の結果

テクノ仮設団地アンケート：大学生によるボランティア活動(健康サポート)という項目について、とても良いと100%が回答した。（図1）

小学校教員アンケートでは今後も大学生にサポートを行ってほしいかという項目について、はいと 100%が回答した。(図 2)

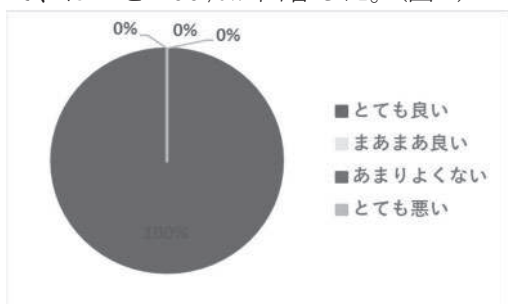


図 1：テクノ仮設団地

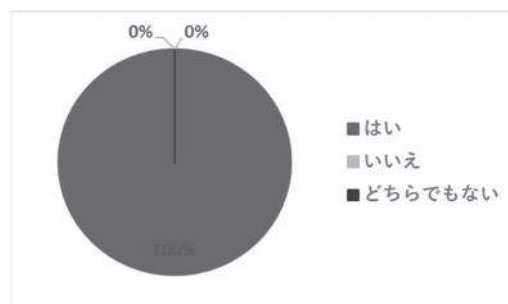


図 2：広安西小学校

どちらも前回得られた 93%(テクノ仮設団地)と 92%(広安西小学校)の回答を上回る結果となった。

昨年に引き続き、小学生向けに行ったピカピカどろだんごづくりのアンケートでは、「おちついた」と「さわやかな気分になった」と回答した児童が 80%を上回った。(図 3)

テクノ仮設団地インタビュー：「震災後、ずっとケアに来てくださり感謝です。また、違う被災地に手を差し伸べて気持ちを和ませてください」

「身体が軽くなって、とっても良かった」「おいしいお茶とお菓子ご馳走様でした」

小学校教員インタビュー：「毎年、学生の方のコメントを録音させていただき、校内放送で流しています。いつも見守ってくださっていることを子どもたちに思っています」

「このような活動が学生さんの将来の仕事につかれた時に役立つことをお祈りします」「暑い中、たくさんの作業をしていただき、感謝いたします」等、活動に対する感謝の声、学生への励ましの声を多く聴くことができ、活動の成果を得ることができた。

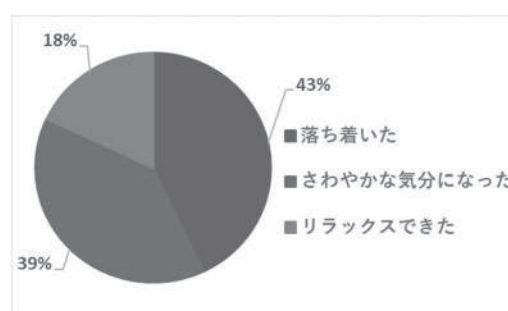


図 3：どろだんご教室

4. 考察

健康サポートプロジェクトは、災害時における被災者にとって有効であり、また継続性が求められていることが明らかとなった。仮設住宅は建設された頃に比べ入居者の数は大幅に減少しており、カフェの来場人数の減少につながっていると考えられる。仮設団地は 2020 年 3 月に閉鎖することが決まっており、復興住宅に移る住民もいるが一人世帯の高齢者は集約を余儀なくされる。新たなコミュニティを形成していかなければならない住民にとって、不安で落ち着かない生活はこれからも続いていくであろう。

小学校では、主に遊びを通して関わりを深めていったが余震の影響などもあり、こころのケアを必要とする児童は減っていない。また、学校の環境整備においても大学生の力が必要とされ、多忙な教員の支援につながったと考える。

本プロジェクトは、復興期の災害支援活動として有効な方法であり、南海トラフ巨大地震発生時にも大学の学びを活かし、人々の健康に貢献できる支援方法であると考えられる。

＜連携先＞ 益城町立広安西小学校、キャンパス熊本、益城町テクノ仮設団地

＜協力団体・組織＞ 常葉大学社会貢献・ボランティアセンターHUVOC、健康鍼灸学科 SinQ

＜活動団体＞ ThunderBirds (16 名)、SinQ (2 名)、教員 (2 名)

*新聞取材：熊日新聞 2019.9.10 朝刊、中日新聞 2019.12.19 朝刊、静岡新聞 2019.12.20 朝刊

とこは未来塾 -TU can Project

2019 年度採択プロジェクト
ポスター集

瀬名キャンパス大学短大活性化 「輪を作り、輪を広げ、地域に大学を開く」プロジェクト

<造形学部> 海野真梨葉 山口日和 山本智香子 松本直子 望月結真 山内裕太 萩井翔 杉浦百々加
<音楽専攻・音楽科> 島田奈七海 鈴木美南 諏訪部勇斗 青木佑汰 寺川太一 瀧美秀美 馬場有彩

目的・狙い

瀬名キャンパスは学部の移転に伴いキャンパス内外での学生の活動が減り、閉鎖的な印象が生れている。そこで、私たち学生が専門性やビジョンを共有し、共通の活動を進めることで、輪が生まれ、それをキャンパス全体と、様々な関係者に広げていくことで、地域社会に貢献するキャンパス「学生中心に文化を創造する場」として新しい姿を生み出すことができると考える。本プロジェクトは、大学・短期大学部の学生が協力し、基礎研究から仮説提案と検証、具体的なイベントの企画推進を通して、閉じかかったキャンパスを新たに地域に開き、創造的なキャンパスとして蘇らせることを実践的に研究する内容である。

事業内容

1 定量調査 事前アンケートの実施 [2019年6月]

まず、プロジェクトの成果をはかる基準として瀬名キャンパスの学生（造形学部・音楽科・音楽専攻）それぞれに事前アンケートを行った。プロジェクト終了時に同項目でアンケートを行い、その変化を比較する。

	人数	調査項目
造形学部	88	・音楽専攻/音楽科（造形学部）にどのようなイメージを持っていますか？ ・音楽専攻/音楽科（造形学部）の学生と（友人を除く）と会話をしたことがありますか？
音楽専攻 音楽科	16	・音楽専攻/音楽科（造形学部）の学生と交流したい気持ちがありますか？ ・音楽専攻/音楽科（造形学部）の学生と協力して何かするなら、どんなことがしたいですか？

3 基礎研究 親和図法による分析 [2019年10月]

調査によって得られたデータを親和図法を用いて分析しラベルを貼ってグループ分けをした。

出来たグループの中から内部に対しては「私たちは今、何が出来るのか」「これから何をしたいのか」「そもそも瀬名キャンパスを盛り上げる必要があるのか」、外部に対しては「造形学部と音楽科・音楽専攻に何を期待するのか」のキーワードに相当するグループ及び小ラベルを抽出した。



▲分析時の様子



5 「造形学部と短大音楽科が、瀬名キャンパスを使って地域社会にできること」[2019年10月]

「キャンパス内部からの情報発信が少ない為、外部との関わりや交流が薄く、学生が抱えている問題点や現状が外部から理解されていない」ことが閉鎖的な印象の原因と結論づけ、情報発信が新しいキャンパスを生み出す第一歩になるという仮説を立てた。

7 企画C 瀬名キャンパスのキャッチフレーズ立案 [2019年12月]

現在、大学側が瀬名キャンパスのキャッチフレーズとして「芸術の丘」という名前を検討している。しかし、私たちはその案に閉鎖的な印象を覚えた。そこで、当事者である学生たちにもキャッチフレーズを考える必要があると考えた。

インタビュー調査（2）と分析（3）に基づき、専門性～人間性、個性～社会性という2軸4象限を設定し、それぞれキャッチフレーズ案を提示した。[図1]

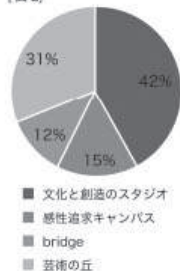
瀬名キャンパス内の学生、職員、入学予定の高校生、卒業生を対象にアンケートを実施した。

307件の回答から、「文化と想像のスタジオ」が127票（42%）、「芸術の丘」が94票（31%）となり、学生の案を大学に提示した。[図2]

[図1]



[図2]



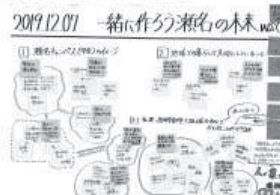
2 基礎研究 定性調査（インタビュー）[2019年7月～9月]

キャンパス活性化の具体的な案を作成するために、内部と外部に対して半構造化インタビューによる調査を行った。内部に対しては「私たちは今、何が出来るのか？」「これから何をしたいのか」「そもそも瀬名キャンパスを盛り上げる必要があるのか」、外部に対しては「造形学部と音楽科・音楽専攻に何を期待するのか」などジョブ・ペイン・ゲインの要素を想定し、調査項目を設定した。

	人数	対象者	調査項目
内部	15	3～4年生の瀬名キャンパス内での生活や学びについて、思い入れのあることを教えてください。 瀬名キャンパス内での生活や学びについて、思い入れのあることを教えてください。	・造形学部の短大に入学して以来の印象を教えてください。 ・瀬名キャンパス内での生活や学びについて、思い入れのあることを教えてください。 ・瀬名キャンパス内での生活や学びについて、思い入れのあることを教えてください。
外部	12	短大の教員 地域の教員	・大学と、短期大学にどんな期待を持っていますか。（どんなことをしてほしい、どんなことで満足してほしい） ・造形学部や音楽科・音楽専攻の学生の学びやキャンパスライフを教えてください。どんなことをしてほしいですか。 ・どんなことができればいいと思いますか？

4 基礎研究 瀬名地域の人を招いたワークショップ [2019年12月]

地域と大学の関係性を見直す必要があると考えた。そこで、約15名の地域の方を瀬名キャンパスに招き交流を深めながら、学生と地域が協力しあうことでどのようなことが実現できるのか、模造紙上でマッピングを行った。その結果、地域の方々は「学生が地域での行事に参加してくれるだけで活気が出るから参加してほしい」という思いを強く持っていることが理解できた。そのような地域と大学の関係性の利点として、学生は地域に貢献する態度が身につく。更に、地域が抱える問題に対して、自らの専門性を活かした課題解決を行うことで、より実践的な学びが可能になると考えた。



▲マッピングした模造紙



▲ワークショップの様子

6 企画A「造形学部卒業制作展を軸にした、キャンパスを開く相互企画」 企画B「音楽科のイベントを軸にした相互協力企画」[2020年1月]

仮説と本来の目的である「専門性やビジョンの共有と共通の活動」を重視し、当初の企画A「造形学部卒業制作展を軸にした、キャンパスを開く相互企画」と企画B「音楽科のイベントを軸にした相互協力企画」を統合した。キャンパス内での相互理解と、キャンパス外（地域）への発信を一つに行う内容である。造形学部の大規模な事業である「卒業制作展」に地域の方を招いて学生がプレゼンを行い、その後音楽科によるミニコンサートを開催する「卒制ツアー」を実施した。ツアー後にはアンケートを配布し、企画が地域の方々にどのような効果を生み出すのかを明らかにした。



▲卒制ツアーの様子



▲ミニコンサートの様子

8 事業成果・今後の展望

研究の成果を測るために、活動の前後（2019年6月、2020年12月）に瀬名キャンパスの学生に対して同じ内容のアンケート[図4]を実施し、比較を行った。事前調査ではAの項目に関しては「楽器や歌の練習をしている」「何か作ってる人」という抽象的な内容だったが、事後調査では「音楽に熱心に取り組んでいるイメージ」「色々なジャンルのものを作っている人」など、具体的な内容に変化した。Dの項目についても同様の効果が見られた。以上のことから、今回の研究活動の成果として瀬名キャンパス内の学生の相互理解を深めることができたことが理解できる。またBの項目に関しては会話をしたことがないという回答が92.1%から84.2%に減少した。しかし、一方でCの項目については交流したいという気持ちが76%から48.6%に減少していた。卒制ツアーという交流イベントを実施したが、目的の1つである「新しいキャンパスの姿を生み出す」ことのヒントにはならないのではないかと感じた。つまり表面的なイベントよりも実質的な信頼の醸成が重要である。今後の展望は、地域社会に対し、造形学部と音楽科がお互いに質の高い文化活動を行い、それらを定期的に発信することで、双方の尊敬の念が深まると考える。具体的には、1年を通して、学びや活動の成果などの細かな情報をwebや冊子を通じて、学内外に発信し続け、学内外の関係者にどのような変化が見られるのかを観察することで、より本質的な成果に繋がると推察した。

	人数	調査項目
造形学部	74	A: 音楽専攻/音楽科（造形学部）にどのようなイメージを持っていますか？ B: 音楽専攻/音楽科（造形学部）の学生と（友人を除く）と会話をしたことがありますか？
音楽専攻 音楽科	34	C: 音楽専攻/音楽科（造形学部）の学生と交流したい気持ちがありますか？ D: 音楽専攻/音楽科（造形学部）の学生と協力して何かするなら、どんなことがしたいですか？

三保、いittoコ！

～世界文化遺産からの招待状～

常葉大学 経営学部 小豆川ゼミ3年・2年 代表 増田悠実(3年)

はじめに

昨年度、小豆川ゼミでは自主活動として「静岡青春プロジェクト」を行った。この活動では、株式会社Otonoと静岡市の協力の下、清水港・三保・丸子・久能山・静岡おまちの5地区の観光ガイドを作成した。また、観光ガイドを元に音声ツアーのシナリオ作成を行い、外部への発信を行った。

今年度は、5地区のうち特に観光需要が大きい三保エリア、開港120周年を迎えた清水港エリアの2地区に絞り、新たな観光ガイドの作成や観光地の分析を行う。活動を通じ、三保・清水港エリアの観光客の増加及び地域活性化への寄与を目的とする。

【三保エリア】

〈活動内容〉

・11月に学内で開催された学園祭で、三保に関連する模擬店を出店。同時にアンケート調査を実施した。
模擬店内容は、静岡市三保松原文化創造センター「みほしるべ」限定で販売されている商品の展示・販売、また本プロジェクトで行った調査をもとに作成した資料の展示を行った。アンケートは三保への意識調査、及び現在の三保に需要のあるものの分析を目的とした。



学祭風景

〈アンケート調査結果〉

集計したアンケートの総数…214件

Q. 三保松原に訪れた経験の有無

あり…65% なし…35%

Q. 設置して欲しい設備等は？

「ゆっくりできるテラスのあるカフェ」…64%

→圧倒的に需要があることが判明
続いて「子供が遊べる場所」「気軽に泊まれる温泉施設」となった。

〈今後の展望〉

現在三保エリアには家族連れや、若年層が立ち寄る集客施設が少ない。よって、あまり関心が集まらず、また訪れた観光客は景観を楽しむ以外の手段がない。この現状を解決するため、静岡市や株式会社Otonoと共同して取り組んで行けたらと考えている。

【清水港エリア】

〈活動内容〉

・10月に清水区の日の出埠頭地区にて開催された、ミナトブンカサイに参加。
横浜国立大学や常葉大学造形学部などによって構成された、ミナトブンカサイ実行委員による観光ガイドを受けた。観光ガイドでは、日の出埠頭地区の倉庫街や清水次郎長ゆかりの施設である末廣、次郎長生家がある次郎長商店街を回った。このガイドを元に、追加で取材を重ね、清水港エリアの新たな観光ガイド、音声ツアーの作成を行った。
音声ツアーのシナリオは、プロのシナリオライターであるたなかよしみ様に作成を依頼した。



末廣



次郎長生家

〈成果〉

前述のミナトブンカサイ実行委員による観光ガイドの成果を引き継ぎ、清水港エリアの見所を再確認した。また、次郎長、四郎のガイドによる「次郎長商店街を巡る新たな音声ツアー」を作成した。

〈今後の展望〉

音声ツアーは2020年1月に完成したばかりであるため、今後は外部への発信やプロモーション活動、インバウンドに向けた音声の多言語化が考えられる。
また今回の音声ツアーを通じ、清水港エリアの関心喚起につながることを期待している。

放置竹林の解消と竹材の活用

常葉大学 経営学部3年 山本隆三ゼミ

目的・概要

静岡県内をはじめとして全国各地で放置竹林が問題となっている。放置竹林が広がると生態系の破壊を引き起こし、土砂災害や地滑りの原因となる。これを解消するための手段として私たちは放置竹林の竹を特産物の生産に活かした梅ヶ島クラブの梅ヶ島紅茶、放置竹から作られた玩具、静岡県の放置竹林問題の解決をめざす県などの行政の取り組みを「エコプロ2019」で紹介した。エコプロ展は日本最大級の環境展であり、今年は全国から14万人を超える来場者が訪れた。多くの来場者に放置竹林問題について知ってもらうと同時に、静岡県及び生産物に興味を持ってもらい静岡県経済の活性化につなげること、常葉大学がどのような活動をしているかを紹介することを目的として本プロジェクトに取り組んだ。

事業内容・方法

本事業では、12/5～12/7 にかけて東京ビックサイトで行われた国内最大規模の環境展示会であるエコプロ2019に出展し静岡県における放置竹林の現状と取り組みや、事業者やNPO法人の方々の協力をいただき、放置竹林の竹を活用した製品の紹介を行った。

- ① 静岡県：放置竹林の整備ハンドブック及び静岡県の放置竹林への取り組みをまとめた冊子・ポスターを借用し、ブースにて無料配布・展示をした。
- ② NPO法人まちなびや：放置竹林を伐採したときに出た竹材を活用した二種類の竹おもちゃを主に小・中学生の来場者に配布した。
- ③ 梅ヶ島クラブ：放置竹を粉碎したパウダーを肥料として活用して作った紅茶・チャイをアンケートにご協力いただいた方に優先的に配布した。

事業成果

12月5日から7日にかけてエコプロ2019に参加し、ブース出展を行った。結果3日間で多くの方が常葉大学のブースに来訪してくださり、その内97人からアンケートの回答を得ることができた。回答を分析した結果、幅広い年代の方が環境問題として放置竹林を認識し、関心を持ってもらうことができた。そして放置竹林問題を周囲に伝えていきたいと答えた人も9割を超え、放置竹林問題を全国的に周知することができたと考える。同時に常葉大学に関するアンケートも実施し、今回の活動を通して大学のPR並びに、地域の活性化にも貢献することができた。

今後の展望

今回の活動を通して、多くの人に放置竹林問題を知ってもらうきっかけを作ることができたと感じる一方、研究不足からブースに来訪された方からの質問への回答に窮することも多くあった。放置竹林から「価値のあるもの」を作り出すためには、技術の発展が必要不可欠である。今後は製紙技術やセルロースナノファイバーなどの放置竹林の活用につながる研究を行っている企業・団体と連携を取り、放置竹林問題解消に向け活動を継続していきたい

エコプロ当日のブースの様子



多くの方が来てくれました！

アンケートの回答結果（一部）

【放置竹林問題について関心を持ちましたか】

はい：98% いいえ2%

【放置竹林問題を周囲に伝えたいですか】

はい：93% いいえ7%

【常葉大学を知っていますか】

はい：43% いいえ57%

【常葉大学生のイメージ】

明るくて真面目/学術的に面白い研究をしている/
地域に貢献している/問題意識が素晴らしい/
産学連携がよくできている/視点がよく将来が楽しみ 等

※回答者 97 人のアンケート結果より作成

静岡市における豪雨災害に備えた、 環境教育による街づくりの推進

常葉大学 自然体験活動研究会 増田敦人 望月咲見 大庭峻輔 小洞晴菜 水谷真菜

1.はじめに

私たち自然体験活動研究会は、自然環境の素晴らしさや命を大切にする心を子ども達に伝える活動を長年、継続しています。大学生が体を張ったオリジナルの環境劇や、自然物を使った遊びや実験の考案・パフォーマンスを行い、子ども達の自然への興味関心を引き出し、「自然大好き・不思議大好き・ふるさと大好き」な子どもを育成しています。

2.経緯

一昨年より約一年半、静岡市の水道事業の一環として、清水区梅ヶ谷にある建設事務所（三井住友建設などJV）に併設した建設業の魅力発信のインフォメーションセンター「しずみいランド」で、ホテルや魚類など周辺の水環境の魅力を展示し、水の不思議を興味深く伝える環境教育講座を継続して担当しました。近隣の小学校の児童をはじめ千人を超える方々に参加いただき、水辺環境保全の意義を発信することができました。この活動が静岡市の関係者より高い評価を得られ、今年度の工事現場の地域でも提案や活動をして欲しいという要望を受けました。

そこで私たちは子どもたちの**自然環境や災害への興味関心を深める**ことによって、自分の地域に予測される豪雨災害の理解と防災活動の重要性に対する認識を深めるため、独自の環境教育活動に取り組みました。

3.実施活動

これまで計4回の環境教育イベントを企画・実施しました。水の不思議プログラムを実施し、子どもたちが身近な自然や現象に気付くよう様々な工夫を凝らしたところ、毎回熱心な取り組みの様子が見られています。

	実施活動
5月31日	工事見学会
7月26日	長田南小学童さんへ環境教育
8月7日	上下水道フェア
8月21日	リコチャレ



↑上下水道フェア

←リコチャレ2019

水オリンピック開催！

上の写真は水の中心に集まろうとする性質つまり表面張力について学んでいるよ。一円玉にスポイトで水滴を載せていって、何滴乗るか競ったよ。水滴が乗った一円玉を横から見ると表面張力によってドーム型になってプルプルしていたよ。



しずみい
静岡市上下水道マスコットキャラクター

鳴らせるかな？水を使った鳥の声♪

穴の空いた竹にストローで息を吹きかけて、それを水の中に入れると…ピョピョ！あれ！小鳥の鳴き声だ！この遊びは江戸時代に流行った水笛って言うんだよ！水って不思議で面白いな！

解き明かせ！サイフォンの原理

水が自然に流れる不思議の、サイフォンの原理について学んだよ。サイフォン君がいるコップの中に水をどんどん入れていっても、サイフォン君が溺れないのはコップの中に秘密があったからだよ。



4.今後の展望

上記のプログラム以外にも、水の循環を知るゲームやロータス効果を利用した表面張力の実験などを通して、子どもたちの水環境への気づきや興味関心を促してきた。今後は、豪雨災害を絡めた環境・防災教育を展開し、より具体的に**地域や災害について学べるプログラムの提案**や、市民や子どもに分かりやすい**パンフレットの作成**に取り組みたい。さらに、環境教育を行った長田南小学校児童クラブを含む多くの児童へ**災害や自然に関する意識調査**をアンケート形式で行い、子どもの災害や自然に対する理解度を数値で比較し、防災意識の向上に対する環境教育の重要性を検証していく。

石部棚田の魅力をぎゅぎゅっと伝え隊

常葉大学 社会環境学部 浅見ゼミ2年

榎本優吾 相澤嘉希 大間清賀 鎌田鎮治 鬼澤陽人 塩川純也 白松知紀 田邊菜々子

活動の内容

私たちの活動は、松崎町石部の魅力を県内外に広めることが目標です。石部＝棚田だけではなく、棚田にいる生物、石部の海のものから石部に興味を持ってもらうことを目指しています。**生物調査**では、棚田の水辺に住む生物の見分け方、特徴を知って、生物に出会ったときの喜びを感じてもらうことを、**地域調査**では石部のひじきについて知ってもらい、石部の海を見に行きたいなど石部に少しでも興味、関心を持ってもらうことを目的としました。

この活動の結果は、パンフレットにまとめて、石部地区にある民宿において頂いて石部に来た人達に広めようと考えています。

生物調査

成果報告 | 5月から10月までに調査した結果、カエル4種、水生昆虫7種、トンボ10種の合計21種を確認。

(1)カエル

- ・ニホンアマガエル
- ・ヤマアカガエル
- ・ツチガエル
- ・シュレーゲルアオガエル

ヤマアカガエル：

山間部にしか生息しない。2～3月に一度冬眠から覚め、産卵する。このため、冬でも水が溜まっている棚田は重要。

シュレーゲルアオガエル：

森の中で生活。4月頃には棚田の畔へ産卵する。



ヤマアカガエル



シュレーゲルアオガエル

(2)水生昆虫

- ・マツモムシ
- ・マメガムシ
- ・シマゲンゴロウ
- ・ハイロゲンゴロウ
- ・ヒメアメンボ
- ・ヒメゲンゴロウ
- ・コシマゲンゴロウ



シマゲンゴロウ

シマゲンゴロウ：全国で水質汚染により数が減少している。しかし、石部では見られた。

マツモムシ：背中を下に向けて泳ぐ。
英名 buck swimmer



マツモムシ

(3)トンボ

- ・マユタテアカネ
- ・アキアカネ
- ・ウスバキトンボ
- ・シオカラトンボ
- ・ホソミオツネントンボ
- ・ミヤマアカネ
- ・コノシメトンボ
- ・オオシオカラトンボ
- ・ミルンヤンマ
- ・アサヒナカワトンボ



ミヤマアカネ

マユタテアカネ：石部棚田の優占種で、顔に盾のような模様がある。石部棚田では石畳の道によく見られた。

ミヤマアカネ：山のほうで見られるトンボ。

ミルンヤンマ：薄暗い小川によくみられる。小川近くの朽木に産卵する。

アサヒナカワトンボ：ニホンカワトンボとの交雑種で伊豆固有。

ホソミオツネントンボ：成体を冬を越すことができるトンボ。



マユタテアカネ

まとめ

活動成果としてアクリル標本とパンフレットを作製。



翅や胸の細部、特徴がよく見えるアクリル標本！！



見つけたその場で同定できるパンフレット！

地域調査 | ひじきについて

～石部とひじきの関係～

〈採取場所〉



- ・ひじきの採取場所には名前が付けられている。
- ・いつもは海水面下に隠れている平坦な磯が、ひじきの採取場所。
- ・あぜは採る分量が最大。

〈採取の今と昔〉

- ・高齢化で採取に必要な労働力が不足していることから**共同狩り**が始まった。
※共同狩り：共同でひじき採取を行い、漁業権を持った各家庭に同じ配分で配られる方法

- ・昔は個人が採取場所を陣取ってひじきを採取する競争狩りだった。

〈採取の日時〉

2日間に分け作業するが天候や曜日によって毎年異なる。

海にも畑？！

採取の後も採取場所に行き、うまのしっぽを刈りとり、畑を耕すようにひじきを育てる場所を確保している。

※ウナノシツボはひじき以外の海藻でひじきの生育を邪魔する。

～乾燥ひじきの作り方～

〈採取〉

鎌で刈り取ったひじきを、竹で作られた「①いしき」に入れる。

〈煮る〉

ドラム缶を使う煮る（5～6時間）
薪は各家庭で用意した『スギ、クヌギ、ヒノキ』

〈干す〉

「②せいろ」を使って干す
細かい網目のものを使っている。

ひじきが黒いのはなぜ？

ドラム缶の中の鉄の成分による影響で時間が経てば経つほど黒くなる。



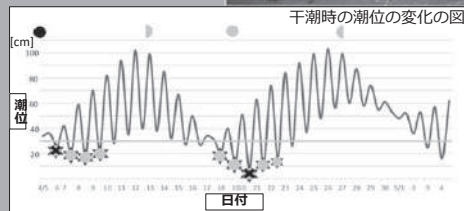
乾燥中のひじき

～ひじき狩りができる日～

大潮時のあぜの様子



大潮時田子観測地点潮位で24cm



干潮時の潮位の変化の図

- 昼に作業できる時間が確保されている
- ★ 昼に作業できる時間が確保されていない

ひじき狩りをする条件

- 潮位：大潮 … ひじきの生育場所出現
- 天候：翌日が晴天 … ひじきを天日干し
- 時期：3、4月 … 質のよいひじき

作業できる日は限られる！

まとめ

今回の生物調査では、合計で21種の両生類、水生生物、トンボを確認することができました。発見した生物の特徴を調べ、棚田に行ったとき持ち運びやすく、誰でも簡単に同定できるような分かりやすいパンフレットを作りました。トンボのアクリル標本を作製し、11月に石部棚田で行われた音楽祭で展示し、興味を持ってもらうことができました。このアクリル標本は石部棚田の交流棟に寄贈する予定です。

地域調査で、石部にはひじきの生育場所が4つあることやひじき狩りの仕方、自分たちが食べている乾燥ひじきの作り方の聞き取り、採取時の条件やひじき狩りを行う日程の厳しさ（潮位・天候・時期）を把握することができました。今春にはひじき狩りを実際に調査に赴き、ひじきがどのように採れるのか確認したいと思います。

石部地区に興味を持ってもらうために、生物の面白さや出会った時の喜びを通して石部の魅力をパンフレットとして発信したい！

西里村まるとエコミュージアムプロジェクト第2期

常葉大学 社会環境学部 小杉山ゼミ

活動目的

2010年、愛知県名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催された。国はその会議の中で採択された「愛知目標」の達成に向けた施策の方針や国内での目標などを定めるため、2012年10月に「生物多様性国家戦略2012-2020」(以下、「国家戦略」という。)を策定した。国家戦略に含まれる基本戦略には「生物多様性を社会に浸透させる」という目標が掲げられており、生物多様性の主流化に向けた取り組みを推進している。

そこで、我々小杉山ゼミは、その目標を少しでも後押しできるように「農村サファリ」という手法を使い、里山で活動している。農村サファリとは、昆虫採集を通して一般の方々に生態系や生物多様性を学んでもらい、自然環境保全の理念を伝えるための教育手法である。

我々は、農村サファリを行うことによって、一般の方々に自然環境を保全する意味を知ってもらうことを目的として活動している。

今年度の活動成果

ビオトープリノベーション

複合力の方たちとビオトープの草刈りを行った。
刈った水場はモリアオガエルの産卵場所に、刈り終えた草等は様々な生物の越冬場所として活用した。



親子環境教室

【春の陣】

解剖学の観点からヤギ、ニワトリ、カエルの脚の構造を観察した。観察の前後のスケッチを比べると脚に注目して描かれたものが多数あった。

【夏の陣】

8月開催の環境教育では、昆虫採集の方法と昆虫標本の作り方を児童たちに伝授した。実際に捕らえた昆虫で標本を作成し、種の同定を行った上で橘小学校へ寄贈した。



カエル王国看板設置

西里区に新たに看板を設置した。看板には、カエル王国図鑑(9種のカエルの生息地等)と西里区の地図を対応させたカエル王国マップが記載されている。



環境調査:カブトムシ養殖

環境教育の教材として有用であるカブトムシの養殖を試みるため、カブトムシが好む苗木の傾向を調査した。



古民家を利用した宿泊型博物館

西里地区内にある古民家を利用し、宿泊者に生物多様性について興味を持ってもらうため、昨年作成したカエルビンゴカードなどや、環境省のポスターを活用し、小学生でも理解できるよう簡単な解説を踏まえた展示を考案した。また、興味を持ってもらえるよう、西里地区内に生息するカエルを用いたキャラクターを制作し、展示に利用する考えである。

カエルビンゴカード



一般の方々に自然環境保全の理念を伝えるべく、今年度は生態系や生物多様性について学べるような活動や環境の整備、教材づくりを行ってきた。

ビオトープリノベーションでは、繁茂しすぎた抽水植物を除草することで水生生物の生息環境を改善に努めた。

夏の親子環境教室では、農村サファリの考えをもとに昆虫を採取し標本にするまでの流れを参加者が体験できる活動を行った。活動後のアンケートやインタビューからは、参加者の昆虫に対する関心が高まったことがわかり、昆虫についてよく知るきっかけづくりの場を提供することができた。

古民家博物館の展示物を充実させるため、西里地区に生息する生物を中心とした展示物と環境省のポスターに解説を加えた展示物を新たに作成した。これらの展示物は、古民家を訪れた方々に西里地区の自然環境の豊かさや、自然環境を保全することの重要性について学べる教材になっている。

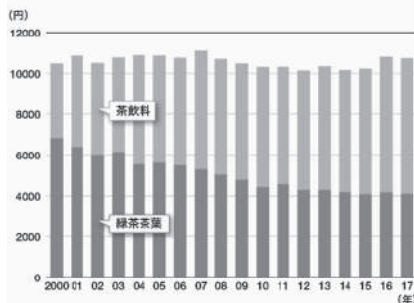
今後の展望

- ・新たに展示物を作成したものの、展示には至れなかったため、展示品の入れ替えを行っていきたい。
- ・親子環境教室では、橘小学校の先生方にインタビューした際に環境教育に関する改善点についてご指摘を受けた。そのため、今後の環境教育をより良いものにすべく、事前の知識共有の強化や新しいプログラムの考察などを行っていきたい。
- ・環境調査は今後も継続し、より良い指標生物の保全活動にも尽力していきたい。



1. 取り組みの背景

緑茶茶葉と茶飲料の消費額の推移



総務省「家計調査(2人以上世帯)」を基に編集部作成

nippon.com

静岡県のお茶農家数は減少しつつある。全国的にみても、20代～50代ではリーフ茶の消費が減少し、ペットボトルの緑茶飲料の消費は増えている。いわゆる「お茶離れ」が進んでいるが、お茶には・抗菌（食中毒菌、病原菌）・腸内細菌の改善・血統上昇抑制作用、糖尿病の予防・リラックス作用・肥満抑制・虫歯予防・持久力増加等、万能ともいえる心身に良い効果がある。

お茶の価値を再認識し、お茶栽培を含むお茶文化を継承していかなければならないのではないかと感じた。保育学部ならではの、お茶文化の継承とは？



<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h00390/>

2. プロジェクトの目的

お茶文化は私たちの静岡県民の誇りであるが、私たちのような若い世代を中心としたライフスタイルの変化に伴い、ゆっくりと急須で淹れたお茶を楽しむようなお茶文化を失いつつあるとともに、お茶文化離れが問題であると考えた。本プロジェクトの目的は児童文化財を用いた静岡のお茶文化の継承である。子どもたちがお茶に親しみ、地域のお茶文化を含めた地域への愛着を持てるよう、静岡のお茶畑を題材にした影絵劇の作成とそれを用いた上演活動を行う。

3. お茶農家の現状調査 現地調査 佐京園(掛川 金谷茶)

- ・温暖化による、度重なる自然災害に対応できない
- ・お茶農家の高齢化と後継者不足による農地の荒廃
- ・需要と供給が釣り合っていない

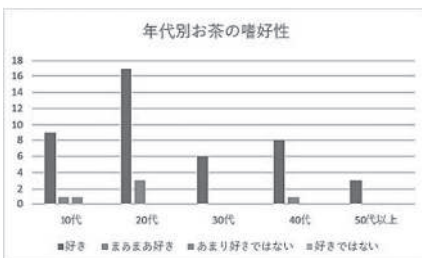


～お茶農家が工夫しているところ～

- ・多様な商品開発、販路拡大
- ・様々な企業とのコラボレーション



4. お茶農家とのコラボレーション 11月2日(土)、3日(日)心薙祭出店 来場者アンケート実施



お茶農家とのコラボ商品の販売 お茶カステラ・ポテト(お茶塩他)

アンケート回答者(49名)のうち、98%が「お茶が好き・まあまあ好き」と回答。

若い年代層においても、お茶への嗜好性が高い。ではなぜ、消費量、生産量の低下、お茶農家数の減少は続いているのか。⇒「身近にあって当たり前のものであるからこそ、その良さや価値を改めて認識する機会がないし必要性を強く感じないのではないか。」

5. お茶文化を広めるツールとしての独自の児童文化財作成と影絵劇作成・上演(清水市内子ども園等)

① 影絵を知る・体験する

- ・「人形劇フェスティバル2019」鑑賞(奨生涯学習センター)
- ・影絵制作体験



② 実践への準備 地元劇団との交流

- ・劇団いちばん星影絵指導(学内)他ゼミも参加
- ・影絵の仕組みと上演スキル(装置、方法)を学ぶ



③ 裏方として上演に関わる 地元劇団へのボランティア

- ・劇団いちばん星25周年記念公演ボランティア(由比朱鳴外学習交流館大ホール)
- ・繊細な作業、段取りを学ぶ



④ お茶を題材にした児童文化財である影絵劇を作成、上演 子どもへのお茶文化の普及



子どものあそび広場

常葉大学保育学部 村上ゼミ

本プロジェクトは、地域の子育て支援として、静岡市の清水駅前銀座商店街のプロジェクト「銀ぶらマルシェ」とリンクし、光あそびを中心にした子どものあそび広場をつくることを目的とする。

具体的には

- 1.子ども：光を中心に、五感を使って普段あまり触れられないあそびを楽しむ
- 2.保護者：光を中心としたあそびを通じて、子どもと保護者がともに楽しむ機会を提供する
- 3.地 域：商店街の活性化に向けて、保育という立場から参加する

一準備の様子一

日時	取り組み	収集・準備	その他
1ヶ月前	素材集め→機材の確認(電球等)→試行	トイレットペーパーの芯 トレー、古着、牛乳パック	会場確認
3週間前	素材集め、看板作成、プラバン、ペットボトルで素材を作る ※各グループにて	画用紙・プラバン ペットボトルetc.	子どもが安全に使うことができるかどうか、確認しながら素材を作成する
2週間前	保育カフェでの事前学習 各グループで準備 ・野菜、廃材等を型に切り取る ・各コーナーの環境構成を考える	野菜、廃材、黒ビニール、カラーセロハンetc.	あそび広場に入るやすいかどうかを検討する(入口etc.)
1週間前	各グループで最終確認	アイスクューブ、蓄光紙、懐中電灯、ライト、サイリウムetc.	子どもたちが楽しめる遊びになっているかを再確認



一当日の様子一

らくがき広場

- ◎フットペイントコーナーで全身を使って絵を描く子ども
- ◎野菜スタンプコーナーでは様々な野菜を使って思い思いの表現する子ども
- ◎子どもたちの作品をシャッターに飾る
- ◎自分だけの“におい”をつくる子ども

6月16日(日)・11月10日(日)・
1月19日(日) 各日10:30-15:00
清水駅前銀座商店街

ひかりの街

- ◎カブラ(積み木)を使ってただ積み上げたり、街並みを作ったりする
- ◎保護者と一緒に子どもが遊ぶ保護者も子ども時代に戻って楽しく遊ぶ姿が多く見られた
- ◎乳児から小学生まで幅広い年齢の子どもたちが楽しむ

不思議なステージ

- ◎光を映し出すライトテーブルや影を映すOHPというものに様々な素材を置いて色や影を楽しむ
- ◎色の混ざりや重なりに興味をもつ
- ◎光の美しさに保護者も興味をもつ

一最終成果とこれからの展望一

- 1.子ども：光を中心に、五感をフルに使ったあそびを楽しむ
→ あそび場が失われつつある子どもたちに、様々な世代が集まるあそび場と普段は味わえないようなあそびを提供できた。実際には、光だけでなく様々な素材のにおいや感触を、探求心をもって楽しんでいた。
- 2.保護者：光を中心としたあそびを通じて、子どもと保護者がともに楽しむ機会を提供する
→ 今回の活動から、保護者に子どもの新たな姿を発見してもらうことができ、さらにあそびの豊かさを知る機会を提供できた。「子どもが夢中になっていたから、家でも取り入れてみたいと思った」などの感想が寄せられた。
- 3.地 域：商店街の活性化に向けて、保育という立場から参加する
→ 足を運ばなくなってしまう商店街に子どもたちが集まり、そこで夢中になってあそべる場を提供できた。

引き続き子どもたちのあそび場をつくり、清水区内だけでなく、静岡市全体から人が集まるような活動を目指す。「商店街」という場が目的がなくても、様々な人やものとの出会いの空間にする。

清水の魅力を観光客・外国人に伝えるマップ制作プロジェクト

森下 実華(代表)、荒石 磨季、杉山 弥鈴(造形学部2年)、渡辺 武瑠(横浜国立大学4年)他計15名

①背景・目的

このプロジェクトは清水の地域資源のブランディングを通して地域の活性化に貢献することを目的とした取り組みである。魅力ある地域資源の一つとして「清水次郎長」を取り上げた。次郎長の歴史を継承し、次郎長通り商店街ににぎわいを創出する手段として、マップを制作・配布した。

現在、清水の市街地を訪れる観光客はエスパルスドリームプラザを中心とする臨海地域に集中している。また、クルーズ船に乗ってやってくる外国人観光客の多くは、下船後、大半が県内の他地域にバスで移動してしまう。一方、臨海地域から徒歩圏内にある次郎長通り商店街にはあまり観光客が見られない。臨海エリアと商店街をつなぐ導線を生み出し、地域経済を活性化すべく、次郎長通り商店街周辺に特化したマップを制作した。

②内容

次郎長通り商店街の飲食店や雑貨屋などの店舗の中から、観光資源となりうる店舗を選出し、個々にインタビューを行い、営業情報を収集した。また、得られた情報をもとに店舗の特徴・魅力を伝える文章を制作した。店舗情報の他に、地域の中にある歴史的建造物や次郎長の歴史に関する紹介文を加え、マップ上に記載した。また、マップのデザインも全くオリジナルに行った。

マップの制作は、2段階で行った。まず、第一段階の日本語版を2019年10月14日に歴史的建造物である日の出倉庫街を中心会場として行われたイベント「ミナトブンカサイ」(主催:ミナトブンカサイ実行委員会)で来場者に配布した。また、日の出倉庫街エリア〜次郎長通り商店街を巡るガイドツアーを実施した。

次にこれらでの意見を踏まえ、使いやすさ、見やすさ等の改善を行い、決定版を制作するとともに、英語版を制作した。英語版は、単に日本語を訳しただけでなく、日本の一般的な市民生活を気軽に見られるという観点に気がついた。また、株式会社Otono、経営学部小豆川ゼミによる多言語の音声ガイドと連携した。音声ガイドのQRコードをマップに添付し、観光客が人のガイドに頼らずに自由に観光することができるような仕組みとした。

③結果

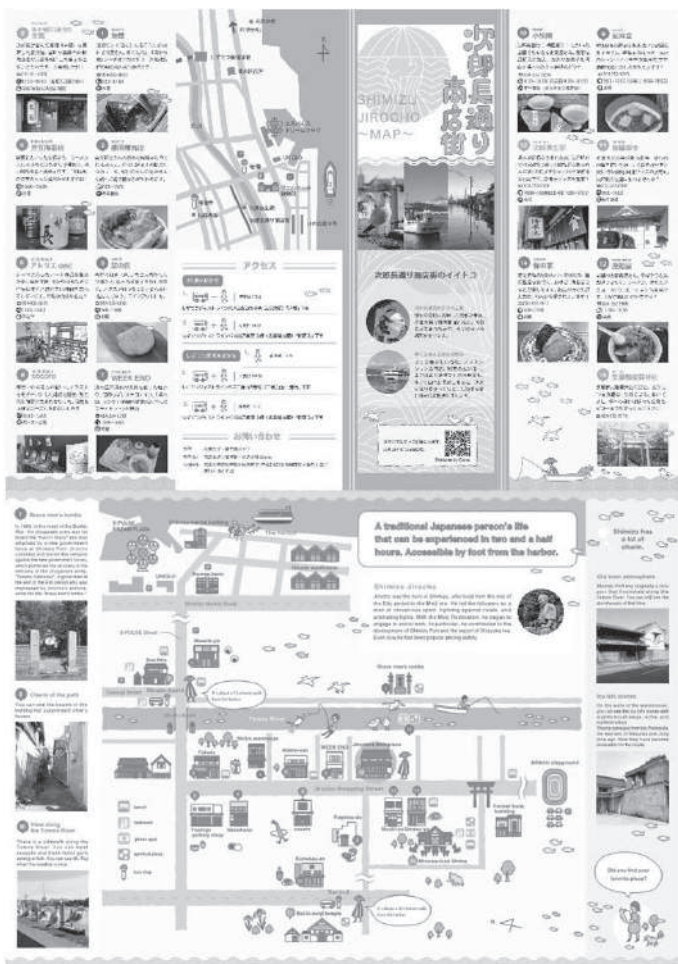
商店街の情報を集約することができた。現在清水の観光案内所や商業施設で配布されている観光マップにおいて、次郎長通り商店街周辺に重きを置いたものは他に存在しない。

また、「ミナトブンカサイ」のガイドツアーでは数十名の参加者を募ることができた。次郎長通り商店街の知名度を向上させ、日の出倉庫街や次郎長通り商店街の地域資源が持つ魅力についても発信することができた。

④今後の展望

今後はマップを日常的に利用してもらえるよう、利用・普及に努めたい。英語版も客船入港時等に、定期的に配布できるとよいと思う。

今回の取り組みは、次郎長通り商店街周辺の地域資源や店舗の魅力を観光客に対して発信することを目的としたものであった。マップを手にして商店街を訪れる観光客が増加し、その様子を見た地域の方々の中から、商店街において新たな取り組みに挑戦しようとする人が現れるのではないだろうか。観光客の視点から地域を見つめなおし、魅力を再発見する機会となればうれしい。



中段上:マップ日本語版 外側
中段下:マップ英語版 内側 観音開きで地図と店舗紹介が対応する

ミナトブンカサイにおけるガイドツアー 日の出倉庫街〜次郎長通り商店街(2019年10月14日)

【プロジェクトのきっかけ】

私たちミズオチ交流会は学生の視点で地域や大学周辺の商店街活性化を考え活動してる。年2回開催される商店街のイベントに学生のブースを出し参加して気づいたことは、イベントを開けば地域の子供たちや親が来て楽しんでくれるが、イベントが無い日は学生たちは通学路として通るだけで買い物や食事等の目的で商店街を使う人が少ないことが分かった。アンケートでも「活気がない」、「通行人が少ない」、「シャッターが閉まっているところがあり寂しいイメージ」など様々な課題が浮き上がった。そこで、私たちは今回のプロジェクトを立ち上げて、7月の「セタバザール」と10月に「ハロウィンイベント」を開催して大規模に行おうと考えた。

セタバザール

【目的】

この2つのイベントを通して北街道の回遊を高め、商店街を知ってもらい商店街の活性化や商店街と学生をつなぐ架け橋とする。また、これらの活動を一度きりすることなく継続的に行うことで北街道だけでなく商店街全体の将来を見据えるためのきっかけとしたい。

お化け屋敷

【取り組み①】

7月6日(土)にセタバザールを市民文化会館前商店街にて開催。私たちミズオチ交流会はボウリング、スタンプラリー、腕相撲マシン、ボール当て、輪投げといった5つのブースを出した。

常葉高校との高大連携プロジェクトということで例年とは異なり不安な部分もあったが各出し物の準備やルール決め、当日の流れの確認といった事を2か月間かけて綿密に行った。



チラシ

【取り組み②】

常葉大学水落校舎敷地内の建物(2号館)を借りてその中にお化け屋敷を設営して開催した。

また、商店街の方にも小規模だが、射的のゲームコーナーを設けた。そちらも40名弱と多くの方に来ていただき、全体的に年齢層は年少から高校生、大学生まで幅広いお客様に楽しんでいただいた。



当日の様子①!



【結果②】

参加者:114名

常葉大学水落校舎敷地内の建物(2号館)を借りてその中にお化け屋敷を設営して開催した。また、商店街の方にも小規模だが、射的のゲームコーナーを設けた。そちらも40名弱と多くの方に来ていただき、全体的に年齢層は年少から高校生、大学生まで幅広いお客様に楽しんでいただいた。



【結果①】

参加者(お子様):49名

結果はミズオチ交流会のメンバーは勿論、商店街の方々や常葉高校、水落キャンパス事務といった沢山の方々の協力もあり、当日は天候不良にも関わらず、多くの人に参加して頂いた為、これ以上ないほどの成功を収めることができた。

【考察と展望】

イベントを開催することによって、集客効果があることは確認できた。また、アンケートにより交流会が独自で行っていた過去のイベントを知り、リピーターとなっていた方々もあり、商店街に興味を持ってもらう効果もあると分かった。

長期的にイベントを開催していけば、商店街に興味を持つ方が増えることが期待でき、商店街の活性化にもつながると考えられる。チラシを見て来ていただいたお客さんも多かったことから、宣伝効果は十分にあったと言える。

今回の成果から、今後はより効果的なチラシ配布、イベント改善を図っていきたいと考える。



当日の様子②!



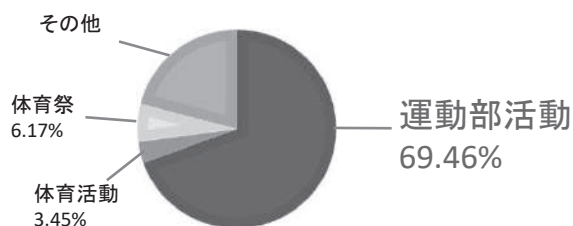
アンケート結果は
パワーポイント参照

【協力】

静岡市役所 商業労政課

1. はじめに

日本スポーツ振興センターの調査では、高校における熱中症発生時の活動別割合は、運動部活動69.46%、体育活動3.45%、体育祭6.17%、その他20.92%と、運動部活動での発生が圧倒的に多く、重篤な場合には死亡事故につながっている。



2. 目的

熱中症に対する予防措置を講じ、適切に対処するために正しい知識を身につけることは、運動部活動に関わっている高校生に必要なことと考える。

本事業では、私たちが大学で学んでいる、熱中症に関する知識や技術を伝え、それらを身につけてもらい、運動部活動中の事故減少に貢献することを目的とする。

3. 取組内容

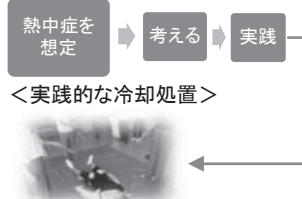
①熱中症とは

- ・運動に関する暑さ指標 (WBGT: 気温、湿度、輻射熱、風)
- ・重症度レベル、病態 (熱痙攣、熱失神、熱疲労、熱射病)



②熱中症の対処法

- ・重症度レベルに応じた対処法



③救急処置

- ・反応の確認
→119番通報、AEDの手配
- ・呼吸の確認
- ・心肺蘇生

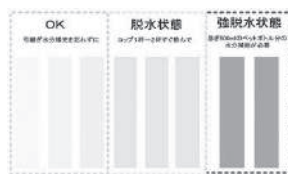
(胸骨圧迫30回、人工呼吸2回、AED装着)



④熱中症の予防策

- ・運動前
- ・運動中
- ・運動後
- ・日常生活

- ✓体調
- ✓尿の色
- ✓水分・塩分補給
- ✓練習環境の工夫
- ✓食事、睡眠
- ✓衣服の工夫 など



4. 結果

＜1回目＞6名 ＜2回目＞11名(保護者5名含) 計22名
学内外でのパンフレットの配布やSNSでの配信、オープンキャンパスでの呼びかけをしたが、想定していた参加者よりも少ないのが現状である。

学外で早期に直接的な呼びかけをしていくことが必要である。

運動に関する暑さ指数であるWBGTを知っているか質問したところ、全員が「知らない」と回答した。また、熱中症の分類についても、「初めて知った」という参加者が大半であった。

心肺蘇生法の胸骨圧迫では、「思ったよりも疲れる」や「大変だ」という感想が聞かれたが、これらの事は体験しなければわからないことである。

このセミナーで熱中症の原因や症状、対処法や予防法について、“知らない”が多くあり、それらが重要な知識であるということを実感してもらえたと思う。



5. 考察

スポーツ現場において熱中症が疑われる傷病者を発見したとき、不安な気持ちによって、知識や技術を有していても、実践できないバイスタンダーは少なくない。

しかし、本事業により、現場で発生することを“イメージ”しながら、“考え”、“実践”することによって、自信を持つことができるようになると思う。

自信を持つことで、リーダーシップを発揮し、予防に関して準備ができ、傷病者が発生した場合でも、冷静に対処できるのではないかと考える。

本事業によって、熱中症に関する知識や技術が身につく、運動部活動中の事故減少に貢献できると考える。

イメージする 考える 実践する 身につく 自信になる

* バイスタンダー: 救急現場に居合わせた人(発見者、同伴者)のこと

6. 今後の課題

1. 夏場の暑熱環境は、今後も悪化していくと考えられるため、熱中症対策のセミナーを継続して開催していくが必要になる。
2. 熱中症の発症時期を考慮すると、6月頃からの開催が必要になる。
3. 学校現場に出向いて開催するセミナーについて検討する。



1.背景

運動部に所属する高校生は、自分の適正なエネルギー量や不足しやすい栄養素を知らない者が多く、学ぶ機会も少ないと感じていた。そのため、私達がこれまでに学んできた食に関する知識を活かし、運動部に所属する高校生を対象に適正なエネルギー量や不足しやすい栄養素について学習する機会を設けたいと考えた。

2.目的

昼食(弁当)に着目し、高校生自身でも簡単に作ることができる料理のレシピ(サポート飯:サポ飯)を考案し、パンフレットを作成を試みた。作成したパンフレットを用いて調理体験を含めた講話を実施し、講義と体験、試食を行い、自分の適正なエネルギー量と栄養素に関する知識を深め、体験する場を設け、実践に結び付けることを目的とした。

3.内容

年月	実施内容	詳細
2019年5~8月	レシピの開発	運動部に所属する高校生に必要な栄養素及び量に着目した、料理のレシピを開発した。テーマは「高エネルギー・高たんぱく質」「冷凍食品の活用」「作り置き」。高校生自身でも作りやすいレシピにした。
2019年9月	レシピの試作	考案されたレシピの手順や味付け、栄養価について確認した。レシピの改良を行った。
2019年9.10月	パンフレットの作成	考案されたレシピについて、パンフレットを作成した。パンフレットの冒頭では、運動部に所属する生徒の1日に必要なエネルギー量や不足しやすい栄養素の解説と弁当箱に詰める主食や主菜、副菜の割合を3・1・2弁当箱法を用いて説明した。
2019年11.12月 2020年1月	啓発	静岡県内の3高等学校の運動部に所属する高校生を対象にセミナーを実施した。作成したパンフレットを使用し、必要なエネルギー量や栄養素量の説明を行った。参加者は考案されたレシピ1食分の調理を体験し、試食した。



講話の様子



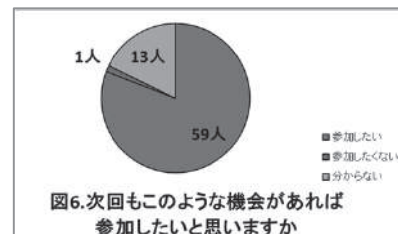
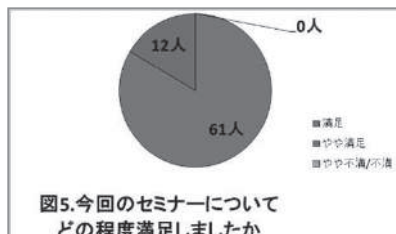
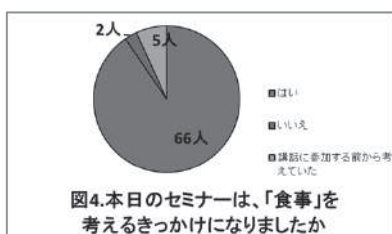
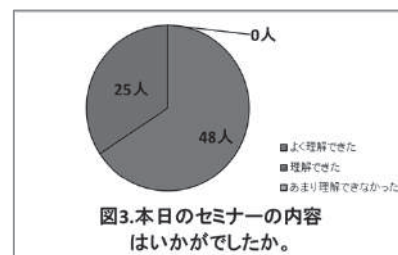
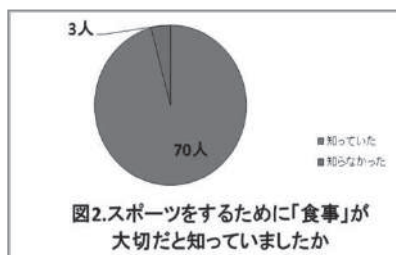
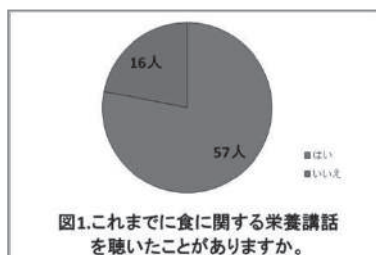
調理実習の様子



詰めたお弁当

4.結果

セミナーへの全参加者73名にアンケートを実施し、解析した(回答率100%)。



5.今後の展望

- ・対象者はセミナーを受講したことで、普段の食生活を見直し、どのように改善するかを考える機会となった。また、栄養に関する知識を学ぶ以外にも、食事を用意する親の苦勞を知り、親へ感謝するなどのプラスの効果が生まれた。
- ・セミナーを実施することで、スポーツを行っている学生の助けやヒントになり、私達も将来の仕事に役立てることができると感じた。
- ・今後も継続して、様々な高校や対象者に「食とスポーツの関係性」を伝える活動をしていきたい。



Health for all people

～大人も子供もみんなで元気に～

常葉大学 健康プロデュース学部 井口ゼミ

3年: 渡部竜空 門ノ澤夏菜 下山紗里 杉山雄飛 鈴木悠利 吉田涼馬

4年: 秋山実優 宿谷さくら 高橋千廣 吉崎良 山本龍也 松浦勝城 山崎直人

～はじめに～

我がゼミでは「すべての人に健康を」というテーマのもと活動を実施している。今年度は脳リフレッシュサロン志都呂と連携して施設に通う要介護高齢者を対象に身体機能測定や認知症予防に関する講座を行った。また、アクトシティ浜松にて行われた健幸アンバサダー養成講座において健康に関する基礎知識や筋力アップの方法、健康情報の伝え方などの講義や実技を行なった。

～脳リフレッシュサロン志都呂～

6月1日・3～7日、12月1～7日に、デイリーサービスセンター脳リフレッシュサロン志都呂にて、当施設に通う要介護高齢者を対象とし、身体機能測定「しとろんピック」を施設の方と共に実施した。具体的な実施内容は握力・5m歩行・30秒立ち上がりテスト・ファンクショナルリーチテスト・開眼片脚立ちである。このしとろんピックの目的は、センター利用者の心身向上と、まだデータのない要支援者・要介護者の目標となる介護度別身体能力の平均値策定である。

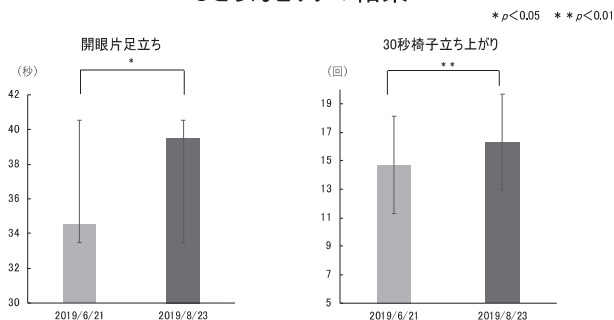
～健幸アンバサダー養成講座～

アクトシティ浜松研修交流センターにて「健幸アンバサダー養成講座」が行われた。私たちは静岡県に働きかけ、医療の大学生を対象に講座を開催し、講座の運営(準備、片付け、講師のアシスタント)を行った。健幸アンバサダーとは、健康づくりに関する正しい知識や指導方法を学び、周囲の人に情報を伝える人材である。また、これは私達の未来塾のテーマである「すべての人に健康を」に酷似しているものであった。今後は、健幸アンバサダーの活動を通して地域の方々と交流し、地域を活発にし、健康へと繋げることが出来るよう活動して行きたい。



健幸アンバサダー講座でのアシスタントの様子

入野協働センター 認知症予防講座
しとろんピックの結果



開眼片足立ち(バランス能力)、30秒椅子立ち上がりテスト(下肢筋力)に有意差が見られ、講座後に改善が認められた。

～今後の活動について～

今後の活動では、具体的なものとして子供を対象とした「めざせアスリート」高齢者を対象とした「しとろんピック」「生きがいつくり運動教室」を中心に活動していく。これらの活動を行う上で、健幸アンバサダーで学んだことを活かし、幅広い層の地域の人たちに、より健康に対する意識を高くできるようにしていきたい。



大学生による「自然災害時における自発的な行動の促進及びきっかけづくり」 3.11はままつ東北復光プロジェクト

〈活動の目的〉

将来誰しもが経験する可能性のある自然災害について考え、災害発生時に自発的な行動のきっかけとなれるよう、学生主体のイベントを企画する。また、これらのイベントで出会った他団体とネットワークを築き、災害発生時に素早く相互支援・情報共有できるような地域環境を構築する。

〈活動内容・イベントの様子〉

地域のイベントへ参加 活動の広報とメッセージカード記入を行う

11月、天竜区春野町で行われた「はるの産業まつり」では、一般来場者へメッセージカード記入と募金箱設置、当団体の広報活動&ボランティア活動を行った。大学内や学生内の活動で終わることなく、広く一般市民にも防災意識を高めてほしいという狙いがある。同様に8月の新都田フェスティバル、常葉大学祭、虚空蔵寺例大祭など、様々な地域のイベントへ参加した。



〔常葉大学祭〕

〔はるの産業まつり〕

「いま、私たちに何ができるの？」

聖隷クリストファー大学 Global Lab、浜松学院大学 HAPハマガク、常葉大学 食プロデュースの3団体とお互いの強みを活かした防災に関するイベントを実施。各団体とも伝える内容や災害に対する考え方が異なり興味深い内容であった。また他大学の学生も多く集まり、浜松市に住む学生として防災に対する意識や備えを再確認することができた。大学生としていま、災害に対して何ができるのかを確かめ合い、災害に対してどう向き合うべきかを考えるイベントとなった。以下は食プロデュースとのイベントで行った備蓄と非常食に関するアンケート結果である。このような結果から、備蓄や防災意識には個人差があることが明らかとなった。

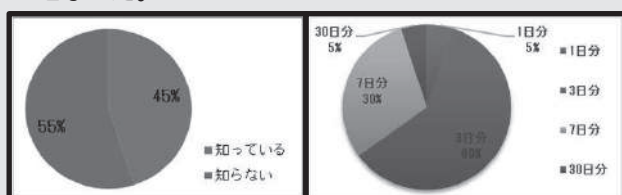


図1：自宅にどのくらい備蓄があるか

図2：非常食は何日分必要だと思うか

年間活動表

月	活動内容
4月	活動メンバー募集
5月	顧問・関連教授へ挨拶、活動方針決定
6月	文字決め、役職決め、他大学へ声掛け
7月	立体ハザードマップ制作、他団体と打合せ
8月	学外ミーティング、新都田フェスティバル
9月	Global Labイベント、静岡社会福祉大学交流会
10月	飯田小学校防災体験活動、企画書・予算書作成、東部協働センター防災活動、学内説明会、三遠ネオフェニックスボランティア
11月	VELTEX静岡ボランティア、常葉大学祭、はるの産業まつり、東北被災地の映画鑑賞、協賛活動開始、三遠ネオフェニックスボランティア
12月	東区防災訓練、HAPハマガクイベント、食プロイベント、第二回学内説明会、神戸社会貢献学会発表、三遠ネオフェニックスボランティア
1月	遠州ビジネス交流会、学外説明会、遠州市場、第一回東西震災シンポジウム、SAVE IWATEへ送るボード制作、三遠ネオフェニックスボランティア
2月	ココスタ報告会、虚空蔵寺例大祭、学ボラフォーラム、街頭募金、とこは未来塾報告会、三遠ネオフェニックスブース出展、キャンドルナイトリハ
3月	3.11復光キャンドルナイト



〈成果〉

〔飯田小学校〕



〔HAPハマガク〕

共催イベントのアンケート結果から、災害に対する日ごろの備蓄や準備が個人によって差があることが明らかとなった。また学生内での防災に関する意見交換に需要があり、参加者の多くは防災に対して危機意識があることも明確となった。プロジェクトを通じて多くの市民・学生に自然災害について考えるきっかけを提供し、災害発生時に自発的な行動の第一歩となれるような活動になったと考える。

〈今後の展望〉

2020年3月11日には1年間の集大成とも言える第9回3.11復光キャンドルナイトを行うが、これまでの体験で学んだことを各自が活かし、それぞれの想いをもって活動に臨みたい。活動メンバーの中には東北被災地や熊本被災地、長野県被災地へ訪れた者もいるが、訪れていない活動メンバーも1年間の活動を通じて感じたことや自分なりの考えを参加する多くの学生、市民に伝えられるようにし、地域との関係づくりを深めていきたい。

南海トラフ巨大地震に活かす 健康サポート支援に関する継続調査 常葉大学ボランティアサークル ThunderBirds

連携: 益城町立広安西小学校、キャンパス熊本、益城町テクノ仮設団地
協力団体・組織: 常葉大学社会貢献・ボランティアセンターHUVOC、健康鍼灸学科SinQ

本事業の目的

ボランティアサークルThunderBirdsは、健康鍼灸学科SinQとの連携協働により、2016年から毎年、熊本県益城町で「こころとからだの健康サポートプロジェクト」を継続実施してきた。昨年は、93%から「とても良い」との評価を得ている。震災から3年を経過した現在、震災関連死は271人となり、今もなお仮設住宅で暮らす人は1万6千人となっている。更に災害公営住宅(2020年3月完成)の建設が着手されているが、被災者は新たなコミュニティ形成に不安を感じているとの声を聴いている。朝日新聞(2019)の調査では、被災者の76%が何らかの不安や問題を抱えているとの結果がでており、継続支援の必要性を感じている。

本プロジェクトでは、熊本での健康サポートプロジェクト支援活動を継続実施すると共に、被災者の健康に対するアンケート及びインタビュー調査から過去2年間の比較を行い、近い将来起こる可能性の高い南海トラフ巨大地震に活かすことのできる健康サポートの在り方を明らかにすることを目的とする。

第5期現地支援活動

①SinQブース

利用者数: 71名 (2日間延べ人数・テクノ50名・小学校21名)

仮設住宅の住民を対象に、もみほぐしや足湯を行った。(写真1)
施術を行いながら震災当時の様子や健康上の悩みなどを聞いた。



写真1: SinQブース

②TOKOHAMAカフェ

利用者: 136名 (3日間延べ人数・テクノ46名・小学校90名)

益城町テクノ仮設団地で2日間、カフェを開設し静岡茶と静岡のお菓子を提供した。住民同士の憩いの場を作ることができた。(写真2)



写真2: TOKOHAMAカフェ

③広安西小学校

3日間にわたり、2年生の授業サポート、登校の見守り、環境整備を行い、2日目の放課後には1～3年生の希望児童約90名に対しピカピカ



写真3: ピカピカどろだんご教室

アンケート結果

【テクノ仮設団地】

大学生によるボランティア活動(健康サポート)という項目について、「とても良い」と100%が回答した。(図1)

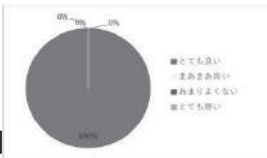


図1: テクノ仮設団地

【小学校教員】

今後も大学生によるサポートを行ってほしいかという項目に対して「はい」と100%が回答した。(図2)

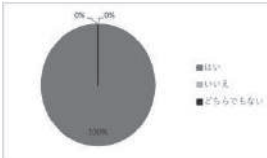


図2: 広安西小学校

前回得られた93%(テクノ仮設団地)と92%(広安西小学校)の回答をどちらも上回る結果となった。

【どろだんご教室】

「おちついた」と「さわやかな気分になった」という回答が多かった。(図3)

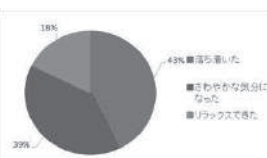


図3: どろだんご教室

インタビュー結果

【テクノ仮設団地】

「震災後、ずっとケアに来てくださり感謝です。また、違う被災地に手を差し伸べて気持ちを和ませてください」「身体が軽くなって、とっても良かった」「おいしいお茶とお菓子ご馳走様でした」

【小学校教員】

「毎年、学生の方のコメントを録音させていただき、校内放送で流しています。いつも見守ってくださっていることを子どもたちに思っています」「このような活動が学生さんの将来の仕事につかれた時に役立つことをお祈りします」「暑期中、たくさんの作業をしていただき、感謝いたします」

考察

災害時における大学生による健康サポートは被災者にとって有効であり、また継続性が求められていることが明らかとなった。仮設住宅は建設された頃に比べ入居者の数が大幅に減少しており、カフェの来場人数の減少につながっていると考えられる。熊本県益城町の仮設団地は2020年3月に閉鎖することが決まっており、復興住宅に移る住民もいるがほとんどの一人世帯の高齢者は集約を余儀なくされる。住民にとって不安で落ち着かない生活はこれからも続いていく。

小学校では、主に遊びを通して関わりを深めていった。余震の影響などもありこころのケアが必要な児童は減っていないのが現実だと明らかになった。学校の環境整備においても大学生の力が必要とされ、多忙な教員の支援につながったと考える。本プロジェクトは、復興期の災害支援活動として有効な方法であり、南海トラフ巨大地震発生時にも大学の学びを活かし、人々の健康に貢献できる支援方法であると考えられる。

■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1

TEL. 054-297-6100 (代表)

教育学部／外国語学部／経営学部／

社会環境学部／保育学部

短期大学部 日本語日本文学科／保育科

大学院 初等教育高度実践研究科

国際言語文化研究科／環境防災研究科

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30

TEL. 054-297-3200 (代表)

法学部／健康科学部

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1

TEL. 054-263-1125 (代表)

造形学部

短期大学部 音楽科

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市北区都田町 1230

TEL. 053-428-3511 (代表)

経営学部／健康プロデュース学部／

保健医療学部

大学院 健康科学研究科



常葉大学
TOKOHA UNIV.

発行：常葉大学 地域貢献センター

発行日：2020年2月26日

URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>